

---

# 愛していると言わない

あしなが犬

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

愛していると言わない

### 【Nコード】

N5374W

### 【作者名】

あしなが犬

### 【あらすじ】

夫となった人は毎晩『愛している』と言って私を抱きしめる。だけど、私は決して『愛している』とは夫に言わない。だって、夫は私を愛していないけど、私は夫を愛している。だから、絶対に『愛している』と言わない。それが私の最後のプライド。

そんな感じの複雑な夫婦と複雑な色々を巡る架空世界が舞台の物語。

「愛している」

私の夫となつた人はそう言つて私を一瞬だけ抱きしめるとすぐに離しベッドに横になつた。

取り残された私はベッドの脇に立ちつくし夫を見下ろした。

結婚して数カ月、彼は誓いの口づけを除いて、こつして毎晩抱きしめること以上のことを私に決してしない。

寝付きがいい夫はもう眠ってしまったらしい、私に向けた背が規則正しく上下している。

(それなのにどうして『愛している』なんて言うの?)

私を拒絶するかのようなその背中に私はいつも問いかける。 だけど、一度だって本人に聞いたことはない……だって本当はその答えを私は知っているから。

(貴方にあるのは私への罪悪感だけ)

その罪悪感故に貴方は私と結婚した。

その罪悪感故に貴方は私に愛を呟く。

……だけど、罪悪感しかないから貴方は決して私に触れない。私を本当に愛することはない。

(頼んだら抱いてくれるのかしら?)

そんな意地の悪い事を考えて、絶対にそんなこと言えるわけがないと自嘲した。

何しろ彼が私を愛していないことを知っていたのに、彼が抱いているだろっ罪悪感を利用して私は彼に結婚を受け入れさせた。

それだけでも彼には申し訳なく思っているというのに、これ以上彼に何かを望むというのは私の我儘の他の何物でもない。

頭ではそう分かっていてというのに、どうして私の心はこんなに傷ついているのだろうか？

（だって、私は貴方をずっと愛しているから）

瞼をつぶればずっと出会った頃の彼が私に笑って手を振った。今となつては決して見ることが出来ないその姿を思い浮かべて嬉しくなってしまう。そんな自分が無性に虚しくなつて溜息をついた。

（せめて自分の本当の気持ちを告白しないことが、私の最後のプライドよね）

私は毎晩、『愛している』と告げる夫に一度もその答えを返したことがない。

## 0 - 1 (後書き)

何となくドロドロの恋愛ものが書きたくて勢いで始めてしまいました。あんまり長いお話にはならないと知っているんですが…どうなる事やら(笑)

お目汚しだとは思いますが、お付き合い頂けると幸いです。

私を夜の眠りから呼び起こすのは、朝の光でもなく、小鳥のさえずりでもない。それは隣で寝ている夫の遠慮がちに起きる気配。

夫はいつも夜が明ける少し前に起きる。

彼は私が自分に合わせる必要がないと言ったけど、そういう訳にはいかないと一度だけ同じ時間に起きたことがあった。

だけど、その時酷く迷惑そうな顔をされて私の心は折れた。ただでさえ疎まれているのに、これ以上の不快感を彼に与えたくなかった。

だから、私は毎朝夫の起きる気配で一度は目が覚めても寝たふりを続けている。

もし熟睡していたら極僅かな夫の気配で目が覚めることもないのかもしれないけど、悩んだまま寝ている私の眠りは浅いらしい。

その後、二度寝をしても誰が咎める訳でもないけど、広いベッドの上に一人で取り残されると強い孤独感が押し寄せて眠りを妨げるので、私はただじりじりと起きる時間を待つ。

そうして私が起き出すふりをする時間に侍女が寝室の扉をノックして、やっと私は孤独感から解放される。

ノックに答えると美しい笑顔で侍女が『おはようございます』と言う。それに『おはよう』と返しながら、夫とはこんな朝の挨拶すら碌に交わした事がないと気がついて苦笑した。

夜が明ける前に寝室を後にする気配を感じた後、彼に次に会うのは眠る前だけ。

彼が発するのは『愛している』の一言だけ

そんな言葉、どうしても信じられるというのだろうか？いや、きっと夫はむしろ信じてほしくないに違いない。

彼が妻となつた私に義務感だけで『愛している』と言っていると分かつていても、これでは却つて寂しくて辛いだけ。だけど、私は決してそれをやめてとはいえない。

それを聞いて嬉しいと思う私が確かにいるから。そんな自分に私は強い嫌悪感をいつも抱いていた。

…というあまりに暗い出だしでごめんなさい。はじめまして、私の名前はアイルフィーダ・ヴァトル。今年で25歳になる。

他に自己紹介を…と思うけど、とりたてて紹介するほど私には特徴がない。強いて言うなら特徴がない事が特徴なのかもしれない。

身長は高くも低くもなく、体型は痩せてもいなければ太つてもいない。髪は一般的な栗色で目の色も黒に限りなく近い茶色。

顔は自分では特別不細工だと思ったことはないけど、一度見ても大抵の人はすぐに忘れてしまいそうな何処にでもある顔で、性格も別に普通だ。

そんな普通という名の皮しか被っていない私が、その皮を大々的に脱ぎ捨てることになるとは思わなかった。

そうなつた理由は夫…世界王フィリー・ヴァトルとの結婚

彼との結婚で私は世界王の正式な妻…世界王妃という、あまりにも特別で、地下深くまで沈んでしまうほどに重すぎる肩書を背負うこととなつたのだ。

「ごちそうさま。」

広い部屋での一人の朝食を終えると、すぐに控えていた使用人が音一つ立てずに食器を片づける。

「食事はお口にありませんか？」

食べ物が半分くらい残ったまま下げられていく食器を横目で見ながら、私の後ろに控えていた侍女ルツティがそう聞いた。

あくまで優しい物言いだけど、その言葉に私は彼女を見上げて苦笑した。

見上げたルツティは侍女だけあって質素な化粧だし地味な洋服を着ているけど、それでは隠しきれない彼女の凛とした美しさはいつも眩しい。

初めて彼女を自分付きの侍女だと紹介させられた時、私はとても申し訳ない気分になったものだ。

「まさか。食事はとても美味しいわ。」

「ですが、ここ最近ずっと食事を残されていますよね？」

美しいだけでなく、ルツティは侍女としても完璧だ。私のことを監視している訳じゃないけど、いつもさりげなくちゃんと見ていて気を遣ってくれる。

慣れない環境にいきなり一人で放り込まれた私がここまで何とかやってこれたのは、彼女の献身的ともいえるサポートがあつてこそだと私は思っている。

だからこそ彼女の働きに報いるならば、食事くらいちゃんとらないといけないんだろう。だけど、この事に関して言えば私にも言い分はあつた。

「出される食事をちゃんと食べられなくて申し訳なく思っではいるの。だけど、ここにきて数カ月、私は後宮から一步も外に出ていない。王妃として何の仕事だってしていない。ただ、日がな一日のんびりと過ごしているだけじゃお腹も空いてこないのよ。」

世界王妃となった私の住まいとなったのは、世界の中心にある神都アッパー・ヤードにそびえ立つ王城。更に詳しく言えばその最奥にある後宮だ。

広大な王城だけで私がかつて住んでいた都市と同じくらいの大きさがあり、私が入り出すことを許されたこの後宮ですら私がかつて住んでいた町くらいの大きさがあるという。

それを聞いたただけでくらりと眩暈がしたものだけど、いくら後宮が広いと言われたって、ここから出るなど自由を禁じられる事は強いストレスでしかない。

さらに言わせてもらえば、自由に歩いていいと言っても常にこのルツティを始めとした誰かがいるという大前提があるのだ。

彼女たちにしてみれば監視しているという意図なんて微塵もないんだろうけど、誰かに傳かれたり誰かを連れて歩くという生活と無縁だった私にとって、それはあまりに居心地が悪かった。

「そのことに関しては私たちも色々手を尽くしております。しかし、現状ではイルフィーダ様の安全を確保できるのはこの後宮のみです。窮屈を強いてしまっていることは本当に申し訳なく思っておりますが、もうしばしの御辛抱をお願いせざるを得ません。」

「…わかってるわ。」

この会話をここ数カ月で一体何回交わしたことだろう。

その度、私はそれ以上何も言えなくて、ただ聞き分けのいい返事をしていく。

「何しろ私はオルロック・ファシズ神を信仰しない陣営の人間です。それを承知でこちらに嫁いできたのだから…我儘は言いません。」

まあ、こうやって嫌味の二つや二つは混ぜているけど。

「アイルフィーダ様にそう言っただけだとありがたいです。」

だけど、ルツティの方が何枚も上手だ。

私が嫌味を返しているというのに、それを分かった上で笑顔でそう切り返す彼女に私はただ大きなため息をつくしかない。

## 0 - 2 (後書き)

たくさんのお気に入り登録をありがとうございます。かつてない勢いで登録が増えていて、嬉しいと思いつつも何だか怖い(笑)嬉しさ余って連日更新などしてしまいました！(多分、このペースは続きません)

読んでいて不快に感じたり、違和感を感じたりされることもあるとは思いますが、作者がまだまだ拙いのだとご容赦いただければと思います。

オルロック・ファシズ  
神を信仰しない陣営

それを語るには、まずこの世界について少し説明したい。  
 ともかくにも、この世界には『神』という絶対的な存在が君臨  
 しているということを、まず覚えていてほしい。  
 …とはいうもの私はその姿を実際に見たことはない。  
 だけど、神は確実に実在している。それがこの世界の常識だ。

神は人を蘇らせ、雨が降らない砂漠にオアシスを作り、ドラゴン  
 を退治した…どれもこれも真実とも嘘とも分からないお伽噺。

だけど、その人知の及ばぬ神という力ある存在を、人間たちは信  
 じ仰ぎひれ伏した。

絶対服従を誓った人間を神も庇護し、様々な恩恵を与えた。

神と人間の友好関係は長く続き、それと同じ期間だけ平和と安寧  
 があつた。

しかし、数百年前よりその均衡は少しずつ壊れ始めた。

それがすなわち<神を信仰しない陣営>の誕生

彼らは神が与える恩恵から離れ人間だけで独自の自治体を形成し、  
 神という存在を否定した。

神に従いしく神を信仰する陣営>と私たち<神を信仰しない陣営

>は、それから大きな戦いこそなかったが、ある程度の緊張状態を  
 持って相対してきた。

ちなみに私がいる神都アッパー・ヤードは<神を信仰する陣営>  
 の中心地であり、私の夫となった人は<神を信仰する陣営>の位置

づけでは神の次点である世界王だったりして…。

まあ、ここまで世情というものを踏まえると、私と夫の結婚の意味がお分かり頂けるのではないだろうか？

<神を信仰しない陣営>の人間である私と、<神を信仰する陣営>の王である夫との結婚は、すなわち敵対し合っていた両陣営を結び付けるための政略結婚という訳だ。

それのために後宮には正室の私しかいないので、後宮の女同士の間争いなどはないのだけど、<神を信仰しない陣営>である私に対する風当たりは非常に強かったりして、例えばこんなお人がいたりする。

「あああ？このお部屋…何だか油臭いんじゃないやありませんこと？」

後宮であてがわれた私の部屋に入ってきた途端、挨拶より先にそのたまった女性に張り付いた笑顔が引きつった。

(ああ、始まった)

輝く金髪の長い髪を高く結びあげ、少々濃い目の化粧に派手で露出が多いドレスを纏った貴族然としたこの女性。

彼女の名前はファイリン・ディレクト。私より年下のくせに襟ぐりの深く開いた所から見える白い胸が目眩しい美女で、実は私の教育係だったりする。

<神を信仰する陣営>の中でも指折りの貴族のご令嬢らしく、神への信仰心があつい彼女は私のことがともかく気に入らないらしく、3日に一度は彼女から講義を受けているが一度だってこんな感じの嫌味がない時はない。

かくしてファイリーンがいつものように嫌味を言つて、顔の前ではたはたと扇を煽ぎ心底不快そうな表情を浮かべていると、ルツティがすかさずフォローになつていないフォローを入れた。

「申し訳ありませんファイリーン様。すぐに窓を開けてまいります。」

「ああ、ルツティいいのよ。どうせ匂いの根源はこの目の前にいる、野暮つたい神をも恐れぬ野蛮人ですから、換気した所でどうしようもないわ。ねえ、アイルフィーダ様？」

「……」

そう語りかけられて、その匂いの根源だとされた私にどうすればいいのだろうか？

(出ていけばいいの？ だけど、ここは私の部屋だし、出ていくなら貴方じゃないの？)

ぐつと出かけた罵詈雑言はごくりと飲み込んで、私はびくびくと米神を震わせて必死で別の言葉を返す。

「ええ、ええそうですね。ですが、どうして私ったら油臭いのかしら？ 侍女の皆さんが毎日綺麗にしてくれているのに。」

「それは勿論生まれてからずっと染みついた香りですもの。どんなに侍女たちが頑張つても、やはり仕方がないことですわ。私、ちゃんと我慢いたしますから。ですが、人前に入る時はなるべく香水を多めにふりかけることをお勧めしますよ。」

そして、『おーほっほ』と勝ち誇つたような高笑い木霊した。

私は思わず頭を押さえたが、変なところで律義なルツティが不思議そうに顔を傾けた。

「ですが、どうしてイルフィーダ様の生まれついてから染みついた匂いが油なんですか？」

「ルツティったら知らないの？」

「もうその話はいいです！」

ルツティの問いに何やら嬉しげにファイリーンが答えようとす  
のを、私は少々大きめな声で遮った。どうせ私を貶す言葉に違いな  
いのだ。そんなもの聞きたくない。

私の大きな声にファイリーンは少し目を見張ったが、今度こそ呆  
れたような私を小馬鹿にしたような笑みを浮かべた。

「王妃ともあるうお方がそんな大声を出すなんてはしたないこと  
ですよ。まったく、貴方という人は本当に何度教えても優雅な立ち居  
振る舞いや物言いが身につかない人ですね。」

彼女の私に対する偏見や嫌みには口にしなくともいくらだつて返  
す言葉が思いつくが、これに関しては彼女の言うとおりだったりす  
るので、言い返す言葉がなくて私は俯く。

彼女に教えを乞い始めて数カ月、確かに私は一向に王妃として必  
要とされる素養が身につけてはいなかった。

すると扇で顎を上げさせられ、ファイリーンは顔をずっと私に  
近づけた。

毛穴一つない白い肌、これでもかというほど長く伸ばされた睫毛、  
つやつやとした赤い唇、彼女は確かに化粧が濃いとしかいえない。  
だけど、その美しさは作られたものだとしても完璧と言わざるを得  
なかった。

その完璧に武装されたに近い顔の中で、だけれど、一番輝いてい  
るのは唯一の天然と思われるその青く大きな瞳。

その瞳がぎらりと光って私を睨みつけた。

「仮にも世界王の妻を名乗るのであれば、いつだって胸を張ってしやきつとなさいな。ただでさえ野暮ったい貴方が俯いたり背中を曲げていては目も当てられませんわ。」

その強い言葉と強い眼光に私は何も言えず、彼女を見つめ返すしかできない。

しばらく、いやもしかしたらほんの数秒のことだったかもしれない。だけど、私にはそれが酷く長い時間に感じられ、金縛りにあつたかのような私相手に先に視線を離れたのはファイリンの方だった。

「まったく、そんな事では来週の舞踏会：先が思いやられますわ。」

「へ？何ですか？」

「まさか知らないとも言っんじやないでしょうね？来週は貴方の夫の誕生日。その日の夜にある舞踏会を始めとした様々な行事に勿論、貴方も参加するのよ。妻なのだから。」

(誕生日？嘘！来週！？)

驚く要素がありすぎて、何から驚いていいか分からない。

目を白黒させる私を見て、ファイリンは勢いよく扇を閉じると油臭いと言った部屋の奥にずかずかと進んでいく。

「さあ、時間が惜しいですし早く始めますわよ。今日からは来週にむけて今までよりもびしばし行かせて頂きますよ！」

そう言って振り返りながら笑った彼女の後姿に悪魔の尻尾が見えるようで、私は目の前が暗くなるのを感じた。

### 0 - 3 (後書き)

やっぱり後宮といえは女同士の戦い!と思ったんですが、何だかフアイリーン嬢の独壇場でしたね(笑)うじうじしている主人公ではありません。でも、第一章はこんな感じの主人公が続く予定です。

さて、次くらいからまだ『愛している』としか言っていない夫が出る…予定です。

後宮で私に宛がわれた部屋は、王妃専用らしく後宮の中でも一番広く豪華な造りになっている。

白を基調とした中に金や赤といった色彩で施された細工は繊細で格調高く、基本が庶民の私には少し居心地が悪い。更にいつも誰かによって片づけられ埃一つない室内は、いつまでたっても私を受け入れてくれない。

まるで他人の家が宿屋にでも泊っている感覚。

眠りが浅いこともあるだろうが、どんなに疲れていても私はこの部屋で癒されたり、休養できたと思ったことは多分一度もない。

その自室でファイリーの教育というより苛めに近い講義に耐え、疲れすぎてすぐにも寝てしまいそうになりながらも、私は夫を待っていた。

どんなに遅くなろうとも夫はいつも私の部屋で眠る。表にも自室があると聞いているけど、結婚以来その部屋で眠ったことはないはずだ。

その理由を彼に直接聞いた訳ではないけれど、偶然聞いてしまった侍女たちの噂話でそれは明らかになった。

『ねえ！聞いた！？』

私に傳いてる彼女たちからは信じられないほど生き生きした声が静かな廊下に響く。

小さな声で話しているつもりだろうが、その廊下はとても声が響き、一人で散歩させてほしいと少しだけ許された自由の時間（とはいっても後宮内だけだけど）を満喫していた私の耳にそれはよく聞こえた。

『聞いたわよ！あのお静かな陛下が声を荒らげてお怒りになったんでしょ！？』

（へえ：それは確かに珍しい。何があつたんだらう？）

夫の話ということもあつて、立ち聞きは悪いと思つたが、何となく物陰に隠れて聞き耳を立ててしまった。

『それも後宮の事で！！』

『そうそう！後宮に行く行かないでもめたつて話じゃない！！』

興奮する彼女たちの会話に比例して、私の心は冷たくなるのを感じた。

『まあ、＜神を信仰しない陣営＞の王妃様じゃあ。陛下が後宮に行く気にならないもの分かるけどねえ。』

『へえ：それじゃあ、後宮に行きたくない陛下を重臣たちが止めようとしたつてこと？』

『多分ね。まあ、陛下も我慢の限界が来たんじゃない？ここまでよく続いた方だと思つたわよ？部屋の片づけとかしている感じ、あの夫婦：実際にはまだ夫婦じゃないし。』

その言葉に同意の声がいくつも上がる。

下世話な話：正直、侍女たちには関係ないと大声を張り上げたい気持ちもある。

だけれど、ここで彼女のたちの前に怒って現れたところで、全て

事実なのだから言い返す言葉もない。それよりも

(ああ、やっぱり本当は私の所なんかに来たくないんだ)

侍女たちの噂によると、後宮に行きたくないと訴えた夫を重臣たちが諫めたことに彼は声を荒らげるほど立腹したということなんだろう。

だが、結局夫はその後も毎日私の部屋にやってきている。

夫の気持ちはともかく、現状<神を信仰しない陣営>の心象を悪くしたくない以上、私がないがしろにされているという噂は問題なのだろう。

そんな噂が立たないよう夫は毎日私の所に通うのだ。

そうして、私は彼が私の部屋を毎晩訪れ、『愛している』と告げる理由を現実として突き付けられた気がした。

それまでは彼の態度が私にどんなにそっけなくて冷たくても、心のどこかでもしかしたらと期待していた。

だって、好きな相手と夫婦になった……どんなに心に強い戒めをしても、『愛している』と言われたら期待してしまう。

だけれど、これはあくまで政略結婚でしかなく、夫にしてみればその相手が彼にとって扱いづらい厄介な相手だということなのだ。

分かっていて。結婚する時、どれだけ自分に言い聞かした？

私は夫の弱みを盾にして結婚を迫ったのだ。どうして彼に好かれるというのだ？嫌われても疎まれても仕方がない。

けれど、侍女たちのその話を聞いて酷く傷ついた自分がいた。

そうして、今日も夫は私の部屋を訪れる。

「おかえりなさいませ、陛下。」

いつもはぎこちなくなる一礼も、妙にはりきったファイリーンの特訓の成果か思わぬほどスムーズにできる。

それが嬉しくて疲れていても思わずにやけてしまいなから頭を上げた私だったけれど、こちらを見やる夫の顔に強い嫌悪感が浮かんでいて気持ちは沈んだ。

「あの…陛下？」

私を嫌っている彼でも、一礼したぐらいでこんな顔をされたのは初めてで戸惑う。

「…なんでもない。さっさと寝よう。」

何でもないというが、とても何でもないようには見えない。

お風呂に入った後らしく、ファイリーンと同じ金髪だが、夫の髪質の方が柔らかいため、いつもはふわふわとしている髪がべったりと張り付いている。

とても整った顔立ちをしている夫であるが、私と同じ年のはずだが未だに十代後半と見紛うほどの童顔が、不貞腐れたかのような表情が彼を更に幼く見せていて、私はかつて彼と出会った頃を思い出した。

（昔の私だったら、無理やりにも何かあったか聞きだすんだろうけど）

夫の拒絶を恐れる私にはそれができない。

嫌われている、疎まれていると理解していても、それを侍女の話を聞いただけでも傷ついているというのに、彼に直接言われた日には立ち直れる自信がない。

それにそんな事を言ったら、もう彼は言うてくれなくなるに違いない。

「愛している。」

与えられる毎日欠かされない言葉と、僅かの抱擁。それを惜しんでいる私が確かにいるのだ。

通常なら最後のプライドでそれに答えることはしない私の沈黙のため、それ以上の会話は続かないけれど、今晩は絶対に聞かなくてはならないことを思い出して、私は今にもベッドに横になるうとする彼に声をかけた。

「あのっ！う・伺いたいことがあるんですけど。」

焦ったあまり舌が絡まる。

「……………何？」

朝から晩まで仕事をしてきているのだ。私なんかより疲れているだろう夫は、うっとうしそうに私を振り返る。

「来週、陛下の誕生祭があると今日ファイリン様に聞きました。私もそれに参加させて頂けるとするのは本当でしょうか？」

ファイリンは私が出席するものだと決めつけて、今日は思い出したくないほど辛い講義だったけれど、実際に本当に私が出席するか否かを決めるのは結局は夫だ。

彼が私の出席を良しとするか否とするか、そこを私ははっきりさせておきたかった。その答え次第で明日からのファイリーンの講義を受ける意識が全く変わる。

もし、参加させて頂けるといっているのであれば、世界王である彼の隣りにいて釣り合いが取れる私でなくてはいけない。

(明日から少しは忙しくなるのかな?)

ファイリーンの講義は気が重い、何も目的がないまま過ごす日常で目標が出来ることが何となく嬉しくて、うきうきした気分になる。

「…ああ、それが。」

だが、私の意気込みの強さに反して夫の反応は酷く薄いものだった。

「出たければ出てもいいし、出たくなければ出なくていい。ただ、国民に対する挨拶の時だけは隣にいてもらうことになるが。」

「え…?ですが、舞踏会もあると聞いています。その席に王妃はいなくてもいいんですか?」

ファイリーン曰く、舞踏会は最初王と王妃が揃ってダンスを踊ることが開会の合図だという。

全ての参加者の前でたった二人で踊るダンスは失敗が許されない。ファイリーンは特訓だと言って、今日は筋肉痛になるほどダンスを練習させられた。

「まあ、君が出ないなら代わりを立てるからいいよ。」

「ただ、夫はあまりにあっさりと言った。」

「去年までは巫女がその役割を果たしてくれていたから、今年もそうすればいいし。多分、もう重臣たちから巫女には打診がいつているはずだと思う。今年はまだ結婚して間もないし、君の舞踏会の参加は見送ろう。」

### 巫女

彼が何気なく発した言葉に、妖精のように可憐な少女の面影がよぎった。

「あ、そうですか…分かりました。」

その声はいつもの私と同じ。だけど、鏡台に映る私の顔は今にも泣きだしそうだった。

(どうして? どうして? 私は貴方の妻ではないの? 私は王妃としての役割すら果たせないの?)

愛されていないなら、せめて王妃として胸を張りたいと思っても、何もさせてもらえない。いや、寧ろ彼らにとって私なんていないと同じ存在なのだ。

だから、私に何も聞かされないまま、すでに私の代役が当たり前のよう存在する。

そのことに強い憤りを感じているはずなのに、立ちすくみ何も言えない私。

昔の私ならもっと思っていることを口にしていた。昔の彼ならもっと私の心を分かってくれていた。

(昔なら昔なら!!!)

目の前が真っ暗になった私は、心の中に光を求めようと目を  
ぶり過去に思いをはせた。

## 0 - 4 (後書き)

これにて序章終了！更新と併せて小話のタイトルなどを変更しましたが、特に内容は変わっていません。  
次回からは二人の過去編を開始します。

それにしても、こんなにたくさんのお気に入り登録や評価を頂いたのが初めてで嬉しすぎてどうしていいか分かりません！拙い話で皆さまを楽しませることができるか不安な部分もありますが、頑張りますのでよろしくお願いします。本当にありがとうございます！

もっと違う出会い方をしていたら、何かが変わっていたのかな？

「アアアアア・アイルフィーダ！！！！！」

そのヒステリックな怒号は静かな校舎によく響いた。

ふるふると震えながら怒りをあらわにする女性教師の前に、私は耳がキーンとするのを我慢して殊勝に俯いていた……いや、本当は笑っている顔を見られないためだけだ。

（『アアアアア・アイルフィーダ』って、『ア』言いすぎだし）

怒られているのは分かっているけど、何があっても笑えてしまうお年頃な私は俯いていたけれど、体が堪える笑いで震えている。

何しろこの女性教師、名をマリアは、全身を常に黒づくめの服装に身を包む厳格でストイックなお堅い人で、風紀委員の顧問教師でもある彼女はそこら中の生徒に些細なことでも注意をする所謂『説教ババア』（年齢的にはまだ20代らしいが）なのだが、今は服装どころか、その髪も顔もいつもはキラリと光る眼鏡のレンズすら全部黒に染まっていた。

なので、黒く染まっていなければきつと顔どころか全身が真っ赤になっているのだろうけど、今はそれすらも分からないほど本当に黒い。

マリア教師がこれだけ怒っているのだから、こつこついう事になった理由は勿論私にあるのだけれど、どうしてかと説明すると、数十秒前に話はさかのぼる。

ここは全寮制の女学校クライン・ステイリア。

女性の社会進出が珍しくなくなった昨今、教養と品格を兼ね備え、自立した女性を育成するための学び舎……とまあ、非常に素晴らしい謳い文句を掲げる結構由緒ある学校だ。

そういう理想的な女性を何人も輩出しているし、学校内にその片鱗を見せている生徒、また、そうとしか思えないようなすごい生徒もいるけど、その大半はごくごく普通な女子たちで構成された普通の女学校でしかないと私は考えている。(まあ、入学試験は難関だけど)

今日は朝から美術で、一日がかりでクラス40名全員で巨大なオブジェを作成するという、美術的センスと協調性や計画性を養うための授業に取り組んでいた。

私と言えばあまり美術は得意ではないけど、一日机に向かっているよりはクラスメイトとわいわい言いながら何かを創っていくという作業は楽しく、主にリーダー格の女子の言うことをはいはいと聞いて、材料を集めたり色塗りをしてみたり奔走していた。

そして、それは私がその過程でバタバトと階段を駆け上がっている時に起こる

オブジェ造りも佳境に入ったが(私には美術的センスはないが、客観的に見て良く分からない塊ができてつつあった)、黒色のペンキがなくなつたため、私はそれを用務員さんの所に取りに行くことになった。

……ここまで聞くと何となくお察しいただけるのではないだろう

か？

私は早くそれを届けたい一心で、『廊下・階段は静かに歩く』という基本的ルールは分かっているけど、はやる心でやや小走りに階段を駆け上がっていた。

黒色のペンキがある用務員室は一階、クラスメイト達が待つ美術室は四階。

結構重いペンキが入った缶を両手で持ちながら最初は軽快に駆けあがっていた階段も、二階から三階に至る階段の半ばに差しかかる結構しんどくなり、四階へ向かう段階になるとゼイゼイと息を荒らげたりして……。

まだまだピチピチの17歳。若いはずなのに、私も半ばムキになっていて、歩けばいいのに最後まで走りきってやると無駄な決意を抱いてしまったのが全ての原因。

息切れでふらふらとなっていた私は、上がらない足のせいで階段に引掛かり思いつきりこけた。

人間、本能的に自分の危機になるととりあえず自分の身を守るもので、顔面強打を避けるため私はその時、何の躊躇もなくペンキの入っている缶を手放した。そうしないと、手で顔や頭を守れないからだ。

ただ、不思議とこういうときって冷静なもので、

(あーあ、ぶちまけられたペンキの掃除は時間かかるだろうなあ)

などと呑気に考えていたのだ。

「キヤア!!!」

そんな悲鳴を聞くまでは。

ちなみにこの悲鳴は私ではない。膝とか缶を放り投げたおかげで

咄嗟に階段に付く事ができた手は、僅かに痛んだが、私には怪我ひとつないのだ。

じゃあ、この悲鳴は？と振り向いて私、絶句。

想像通りにペンキがぶちまけられていたのだが、同時に後に分かったのだけれど階段を走っていた私を注意しようとする後ろにいたマリア教師が頭からペンキを被って立っていた。

とまあ、そんな訳で私はそのまま廊下で黒色のペンキを全身に被ったマリア教師に怒られることとなった。

私としては説教するより先に、マリア教師にかかったペンキをどうにかすべきだと思っただけで、怒りのあまり彼女はそれすら考えが至らないようだ。

教師の声の大きさに気がついて怒られている私を、四階からクラスメイト達が野次馬根性丸出して覗いているのが見えたが、マリア教師はそれにも気がつかない。完璧に頭に血が上っているらしい。

曰く『貴方は元々落ち着きがない』だとか『そんな事では立派な女性にはなれない』だとか、正直余計な御世話だと言いたくなるようなことを言われ続け、比較的彼女に怒られることが多い私は聞きなれた説教を右から左に聞き流すしかない。

それには気が付くマリア教師が目を吊り上げた。

「聞いているのですか！！！」

「はい！」

ずっと俯いていたが、そう怒鳴られて思わず彼女の顔を見てしまい、堪え切れずに吹き出してしまう。

だって、眼鏡をしていたおかげで目の周りだけペンキを避けられたその顔は、まるで笑わせるためだけに化粧を施された変なピエロの様で笑わずにはいられなかったのだ。

「~~~~~貴方という人はあああああ!!!」

しかし、そんな風に笑ったらマリア教師の怒りに油を注ぐことは明らかで（だから、顔を見ないように俯いていたのに）、彼女が握っていたペンキで黒くなってしまった眼鏡にひびが入るのが見えた。

（げえ…本格的にやばいかも）

キーンと頭に響く怒号は更にヒートアップして延々と続き、私のクラスのオブジェは結局その日時間内に完成を見ることはなく、クラス総出で居残ることとなってしまった。

クラスメイト達には申し訳なくて謝ったけど、皆、マリア教師のあの姿で笑わせてもらったと怒られることもなく、更にぶちまけたペンキの後片付けも皆が手伝ってくれたおかげで早く終わった。

あれだけ怒られたことでさすがに凹んでいた私にはクラスメイト達の友情が身にしみて嬉しく、その日の事はそれで全て片が付いたと、寝て起きた次の日には全てを忘れていた私である。

だから、その三日後、マリア教師に呼び出されて、一体何事だろうと思っても、その時の出来事なんて微塵も思い出さなかった。

「アイルフィード。貴方には先日罰として、授業外に奉仕活動を申し渡します。」

そうして、何を言われているのか分からずに『何の事ですか？』と聞き返してしまった私は、その後またマリア教師に説教を受けることとなった。

## 1 - 1 (後書き)

これから一応本格的な物語の開始です。

アイルフィードの性格が序章とは全く違いますが、昔の彼女はこんな風に明るくて活発な少女でした。そんな彼女がどうしてあんなにうじうじしてしまったことになるのか、その原因は物語を通じて明らかになっていきます。

全然、気が付いていなかったんですが【小説家になろう】のランキングにこの『愛していると言わない』がランキングしていることを昨日知りました(笑)

こんなことは初めてで考えが至らなかったというか：本当に読んでくださっている皆様のおかげです！ありがとうございます、これからもお付き合いいただけたら幸いです！！

生家を離れ学校内の寮で生活しているため、校外に出るには外出届けというものが必要になる。

基本的に理由のない外出は許されないけれど、休みの日などは買い物などに出かけたりといった理由でも外出届けが受理されやすい。もともと夕刻の門限は非常に厳しい。

私も何度か外出届けを提出したことはあったが、その外出理由に『奉仕活動』と記入する日が来るとは思わなかった。

「残念だったな、アイル。今日はお前が楽しみにしていたカフェに行く予定だったんだろ？」

寮の管理人に記入を終えた外出届けを渡しながら肩を大きく落としている、後ろから声がかかる。

そこには同じ年の姉エリーが立っていた。

背がすらりと高くショートカットがよく似合う彼女は、姉とは言え同じ年にも関わらず非常に大人びた容姿をしていて、女子高ではありがちな皆の『お姉様』と崇められたりしている。(しかも、本人も悪い気がしていないらしく、今やファンクラブ的なものまである)

「笑わないでよエリー。ますます凹むから。いいのお土産は既に依頼済みだし。」

元々、今日は数人の友達たちと新しく出来たカフェでお茶をするはずだった。

それを何が悲しくて奉仕活動に貴重な休みを費やさなくてはならないのか……自業自得なのかもしれないけど、正直マリア教師を恨

みたくなる。

今までだつて彼女に罰として反省文を書かされたり、校内の清掃をしたり、色々させられてきたが休みを潰されるまでの仕打ちはされた事がなかった。

まあ、あの『マリア女史真つ黒事件』（新聞部命名）はここ最近で一番の衝撃的な事件ではあったけれど……だって、わざとじゃないのに。

「そうか。まあ、校外の奉仕活動なんてなかなか体験できるものじゃないし、きつといい経験になるさ。腐らずに頑張るんだぞ。」

根が真面目で優等生のエリーらしい言葉に、内心閉口しつつも私は受理された外出届の自分控えを鞆に押し込むと彼女に笑顔で手を振った。

「はいはい。じゃあ、行ってきます。」

そう言った言葉は自分で言うのもなんだけど、かなり心がこもっておらず、エリーが微妙な顔をして見送っているのに私はぺろりと舌を出した。

クライン・ステイリア女学校があるのは、<神を信仰しない陣営>の中央都市・メルトファウストの郊外だ。

現在、この都市を中心として<神を信仰しない陣営>の自治都市は今や三十三に及ぶ。ここまで陣営が大きくなるまでには、それはそれは大変な苦勞と時間がかかった。

幼い頃から教わる昔話によると、遙か昔、創世神話の時代にはこの世界は雑草すら育たない不毛の大地だったという。

それを豊かにし、人間が住める環境にしてくれたのが神という存在だ。

しかし、時を経てその神から離反した先人は、当初食べていくのも難しいほど困窮したという。

離反した以上、神の加護のない大地に追いやられる結果となった先人たちであったが、その大地は無論、不毛で雨が降らず、更には度重なる自然災害もあり、今まで受けられていた神の恩恵の大きさを実感し、自然の偉大さと人間の無力さを悟つたらしい。

直後は一度は離反したけれど、やはり神の御許に逃げ帰る人たちも後を絶たなかったということだ。

だけれど、そんな過酷な中でも生きること諦めず人々を導いたのが、聖女ファミリア・ローズ様。

<神を信仰しない陣営>の人間ならば、知らない人はいない正に伝説の人である。

彼女は特に人知を超えた力を持っていた訳じゃないけど、その素晴らしい人徳と人々に対する献身的な愛情は、彼女が亡くなって数百年という時を経ても未だに伝説として語り継がれるほどで、当たり前だけど無神教者の集まりにも関わらず、彼女の教えを後世にも伝えようとする集団はメジャーに存在する。

ファミリア・ローズ様の名前をとった集団の名は【薔薇の会】。

どこの町にも必ずと言っていいほど、その集会場などがあり彼らはファミリア・ローズ様の教えを広めるだけでなく、それを実践すべく無償奉仕を行い、恵まれない人のために生活する場所を提供した。

と、まあ少し話はずれてしまったけれど、そのファミリア・ロー

ズ様をはじめ偉大な先人たちは過酷な環境下であつても、大地を耕し、灌漑整備を進め、災害に対する対策を進め、段々と自分たちが少しでも住みやすい環境を整えていった。

そして、神の力ではなく、人間の力『科学』や『機械』を用いて今や、<神を信仰する陣営>の大都市にも匹敵するほどの豊かな都市となるまでに<神を信仰しない陣営>を発展させていったのである。

以上、<神を信仰しない陣営>の歴史講座終了！

もつとも、私は生まれた時から既に豊かな街並みと生活しか知らないのです、それがどれくらい大変だったとか、貧しかったのかも知らない。

だけど、実際には親世代の子供時代くらいまでは結構苦しい生活を強いられていたと授業で学んだ。

…ということは、本当の意味で豊かになったのはここ数十年ということなのだと思う。

(数百年間、苦しかったというのに…ここ数十年の間に劇的に変化する何かあつたってことかな?)

授業の内容を思い出そうとするが、授業自体をぼんやりと聞いていたのでそれに思い当たる部分が浮かんでこない。

(うーん…帰ってからエリーにでも聞いてみよう)

成績優秀な姉に聞けばいいかと、安易に考えながら私は見慣れた活気と豊かさに溢れた街並みを横目に目的地へ足を速めた。

大通りを裏道に入つて、建物と建物の間にできた迷路のような道を地図を頼りに進む。

難解な迷路に道を誤り、その度に近所の人に道を聞いて修正を繰り返す事、数回……私はやっと辿り着いた。

一見すると少し大きなお屋敷っぽい外観。

小さな白い花が咲く生垣と、そこからはこじんまりとした白い石造りの古そうな建物と、あまり手入れされているとは言えない色々と生えっぱなしの庭、その庭で走り回る子供たちとその声が聞こえた。

生垣に沿って歩くと、立派な門とその門に【ローズハウス】という札が掲げられている。

そう、マリア教師が私の校外奉仕活動の場を選んだのは、先程説明した薔薇の会の施設の一つだった。

(詳しい内容は行ってから聞けつて言われたけど、子供がいるってことはここは孤児院みたいな場所ってことだよな。)

どんな場所に放り込まれるのかと気が重かった私は、子供の相手くらいならどうにかなるかと少しだけ安堵する。

門をくぐり、玄関のチャイムを押すと、カランコロンと可愛らしい鐘の音がして、人がパタパタと近寄ってくる足音が続いた。

「いらつしゃい！貴方がクライン・ステイリア女学校の生徒さんね。私はレイチエルよ、よろしくね！」

出てきたのはとても澁刺とした若い女性。

白シャツにダボダボの厚手のズボンを履き、茶色の髪は一つに結

ばれ、顔には化粧の一つもしているようには見え、美しいとは言えなかったが、その生き生きとした笑顔は初対面の私にすら元気を与えてくれるような感じのいいものだった。

「は…はい。クライン・ステイリア女学校から来ましたアイルフィード・ファシズと言います。今日からよろし」

「まあまあ！そんな堅苦しい挨拶は抜きにして早速皆に紹介しなくちゃ！皆、若いお客さんが来てくれるって楽しみにしてたのよ！」

（若い？）

昨日の夜から考えていた挨拶をいい終わる前に、レイチエルさんに背中を押され建物の中に押し込まれる。

遮られたレイチエルの言葉に少し疑問を感じながら、何の心の準備もできないまま、色々とぐいぐいと押され私は驚くやら、どうしていいやらで混乱する。

玄関からまっすぐ廊下を進むと、大きな扉を開いてレイチエルさんが私を中に案内する。

その向こうにある多くの視線に私はぐっと緊張が押しあがるのを感じ、更に目の前の光景に頭が真っ白になった。

（え？え？ここって孤児院じゃないの？）

中々大きなリビングらしき場所に、たくさんの人が私の顔を興味深そうに眺めていた。

その中には私の予想通り何人かの子供もいたが、それよりもはるかに多い人数の想像していなかった人たちがいた。

円らの瞳、小さくて細い瞳、眼鏡で拡大されて歪な大きさを持つ瞳、病気だろうか白く濁った瞳、うたたねしているのだろうか目脂

が張り付いたまま閉じられた瞳……ずらつと十数人並んだその瞳たちは、それぞれの歴史が積み重ねた個性を持った瞳をしていた。

「はい！ー！皆さん、今日は若いお客様が遊びに来てくれました！お名前はアイルフィーダさんと仰るそうです。今日はよろしくお願ひしますね！」

レイチエルさんがビビっている私を一步前に押し出す。

「よ……よろしくお願ひします。」

思わずもった私を笑う人は誰もいなかった。だけど、数人の子供が私の言葉に返事をしたけど、ここにいる大多数の人がぽかんと私を見ているだけだ。

「あはは！もつと大きな声で言わないと聞こえないわよ。ねえ！？」

「はああ？」

レイチエルさんが豪快に笑いながら、近くにいた人の耳元で叫んだ。するとそれすら良く聞こえていないのか、しゃがれた声が返ってくる。

その人はどうみても齢を相当重ねられたご老人にしかみえず

……

薔薇の会が運営する施設【ローズハウス】、ここは身寄りのない子供を世話する孤児院であると同時に、身寄りがないご老人達も一挙に世話する老人ホームでもあったのだ。

## 1 - 2 (後書き)

説明ばかりが多いうえに、色々と進んでいなくて申し訳ありません。  
早くもつとドロドロさせたい！と思っているんですが(笑)

急速な経済的發展で働く場も増え、同時に女性の社会進出も伴って、家という場所には極論かもしれないけど子供と老人が取り残された。

勿論、それは全ての家に当てはまることじゃない。

結果として老人が孫の面倒をみる構図が出来あがって、微笑ましい光景かもしれないけれど、それはあくまで孫の面倒をみる事ができる元氣がある老人のいる家に限られた構図でしかない。

それが出来ない老人という存在は、赤子と同じ、いやそれ以上に介護という名の手間を必要とする事もある。

それは決して悪いことではない、人として老いた時それは当然の事実ではない。

だけれど、子供と老人しか残っていない家で、子供も老人も共に人の助けを必要としているのに、その手がないという現状……それは少なからず社会問題として取り上げられさえしている。

(そういえば、そんな事授業で聞いた気がする。)

子供と老人たちの好奇の目に晒された後、レイチエルさんに紹介されたローズハウスの責任者だという、ユーナ・レシエットさんから、そういった社会問題に小さくとも助けの手を差し伸べるためにこのローズハウスがあるのだと、この施設の存在意義を私は聞いていた。

孤児院と老人ホームの混合施設の存在を私は知らなかったのだけれど、現実にもそれはほとんどないらしい。

どちらか片方に特化した方が色々な事が上手く回るし、施設としても面倒が少ない。

「だけれど、こういう形にして私は良かったと思っているのよ。身寄りのない子供にとって、この大人は甘えられたり、叱られたり限りなく家族に近い存在になるし、大人にとっては子供を見守ることとで生きがいを見出したりする。全ての人に当てはまることじゃないけれど、それぞれが良い刺激を与えあっていると私は考えているの。」

「今のお話で言う所の【大人】…というのは、ご老人達の事を差すんでしょうか？」

「ええ。老人という言葉を使うと、彼らは気を悪くするから。子供たちと区別するために、スタッフたちは老人たちを総称して【大人】ということが多いの。」

なるほどと話を聞きつつ、私から見れば彼女も十分にその『大人』の一員なのだけれどと思ったりして…：…けれど、小さく丸い体に、薄化粧をしてワンピースに身を包みコロコロと明るく笑いながら話す姿は、こう言うっては失礼かもしれないがとても可愛らしく、これまでご老人と言う存在と関わったことのなかった私に親近感を抱かせた。

「それにしてもここがどういう場所か知らされずに来たのでは、驚いたでしょうねえ。まったくマリアも人が悪いわあ。」

「レシエットさんはマリア教師の事をご存じなんですか？」

妙に親しげない方に首をかしげる。

「レシエットではなく、是非ユーナと呼んで頂戴。ええ。よく知っているわよお。あの子は小さい頃、この近所に住んでいたね。子供の頃は毎日のようにこの庭で遊んでいたの。」

そう言うてうっそうと茂る小さな森のような広い庭を窓から見つ

めた。

庭は外から見ると手入れのされていない庭の様に感じられたが、こうして屋敷の中から見るとそれはある意味計算されている造りなのかもと私に思わせた。

子供の頃だったら秘密基地にしたいような背の低い木の影、うつそうと生えているかのように見せつつも子供たちが走り回ることができるように避けられた草、意外と美しく整えられた花々。

(うん。悪くない)

芸術的ではないにしても、遊んだり探索するにはうってつけの庭に違いない。私は心の中で何ともなしに頷いた。

ちなみに私が今いるのは建物の1階で、ユーナさんの執務室的な場所らしい。大きな窓から庭がよく見え、今も子供達が庭を駆けまわり、それを老人たちが微笑ましげに見守っている。

「この子供以外も出入りが自由なんですか？」

「勿論、ちなみに子供だけじゃないわ。大人だって、学生だって出入り自由。だから、貴方もここにいますのでしょ？」

「はあ。」

「ここは誰も否定しない、誰もを受け入れる場所。実際、ここで生活をしているのは今、ここにいる内の大体三分の二くらいの人数なの。結構、近所の人遊びに来てくれるのよ。」

にこにこ微笑みながらそう告げる彼女のこの施設に関する話は延々と続き、それに対して私はとりあえず『はあ』と気の抜けた相槌を打ちつつ段々とその話に飽きてくる。

なので話半分で聞きつつ意識を他に飛ばし、何気なく窓の外を見ていると視界を横切る異物に目を見張った。

それはまるで一枚の絵。

優しい木漏れ日の中、想像もできないくらい美しい少女が車椅子を押して庭を歩いている。

(……綺麗)

同じ茶色の髪なのに、ふわふわの長い髪はつややかで、深い緑の瞳は大きく長い睫毛に囲まれ、白い肌にバラ色の頬……何から何まで完璧な美少女から私は目が離せない。

「貴方には子供の遊び相手や大人たちの話し相手をしてもらおうと思っっているの。学生さんは中々遊びに来てくれないから、きつと喜ばれるわ。」

「あ、はい!」

しかし、私が美少女に見惚れている間も続いていたユーナさんの言葉にはっと我に帰る。

「ちょうど今から昼食なの。食堂に皆集まるから、一緒に行きましよう。」

その言葉に促されて席を立つ、そうしながらちらりともう一度窓を見ると、美少女は既にいなくなっていた。

(私と同じ奉仕活動なのかな?)

だったら是非お友達になりたいものだ、その時の私は呑気に考えていた。

食堂での食事はまさに戦場の如く……だった。

子供と大人とはなく、これじゃあ子供と大きな子供だと私は思った。

スプーンを持つことすらできない手で食べる食事は、そこらじゅうに食べかすが飛び散り、介助者の手がないと言って駄々をこねるお爺さん、食事がまずいと言って皿をひっくり返すお婆さんまでいる。

子供たちの方が余程、静かに綺麗に食事をしていると、私は始めている光景に戸惑いを隠せなかった。

そして、それは食事に留まらない、普段の生活においてもやれオムツが濡れた。歩けないから車椅子を押せ。トイレに連れて行けなど、文句と言うか彼ら大人の要望は後を絶たない。

それをレイチェルさんを始めスタッフの人たちは笑顔一つでテキパキとこなしていく。

戸惑っている私の方が物知らずで、これが当たり前のことなのだと言わんばかりに、なんの文句も抵抗もなく。

そんな姿は私にとって本当に尊敬する他なく、私と言えば何もできないまま子供たちの遊び相手や、大人たちの話し相手を務めただけに、酷く疲れてしまっただけの日が終わった。

「今日はお疲れ様！初めてのことばかりで疲れたでしょう？」

「いえ…本当に何もできなくてすいません。」

来た時と同じ笑顔のレイチェルさんと、酷く疲れた顔をしている私とは何が一体違うのだろうか？

「何言っているの！子供たちは遊んでくれるお姉ちゃんにはしゃい

でいたし、大人たちは私たちじゃゆつくり聞いてくれない話ができる若い娘さんが来てくれて、本当に喜んでいたのでよ。」

「そうだったらいいんですけど。」

「本当本当！じゃあ、また来週よろしくね！もう、日も落ちるし気を付けて帰ってね！」

「はい。今日は本当にありがとうございました。」

レイチエルさんに一礼して私はローズハウスを後にした。現在、夕食の真っ最中なので、私の見送りは彼女一人だ。

（そういえば、あの迷路の路地をまた帰るのか。迷わずに帰れるかなあ）

疲れた頭でぼんやりとそんな事を考えていた時、夕暮れに長く伸びる他人の影が俯いた私の視界に入る。

それに気が付いてふと視線を上げると、すっかり頭から抜け落ちていたけれど、庭で見た美少女が私の目の前を横切っていた。

私は何も考えず、気が付くと彼女を呼びとめていた。

「あ…待って！」

その時、私がどうして彼女を呼びとめたのか、その理由を私は自分で答えることが出来ない。

もしかしたら、自分と同じような疲れを感じているかもしれない少女と一緒に何かを分かち合いたかったのかもしれない。

それともた、ただ目を見張るほどの美少女とお近づきになりたいかっただけかもしれない。

だけど、どんな理由が私の中にあっただかは定かではないが、何にしても私は【彼女】に声をかけた。

「何？」

振り返る美しい少女、後に私の人生において大きな存在となる彼女との出会いを、私はその後何年たっても鮮明に覚えている。

彼女の視線は愛らしい顔とは裏腹に酷く眼光鋭いもので、私が思わずたじろいってしまったことだって、昨日のことのように覚えている。

「ねえねえ、ニータはどの辺に住んでいるの？」

「ガデイバ地区」

「おお！高級住宅街だ。お嬢様なんだねえ。じゃあ、学校は何処？」

「レンブルトン学園」

「おお！お金持ち学校！じゃあ」

「いい加減にしろ！！！」

淡々と無表情で私の質問攻めに耐えていた、先日ローズハウスからの帰りにナンパした美少女ニータが、我慢できないというように声を荒らげた。

その見た目は本当に本当に愛らしいのに、その大きな瞳から放たれる光は鋭く、荒らげた声はドスが効いていて、お近づきにはなつた事がないので正確な所は分からないけど、きっと札付きの不良にもきつと引けを取らないと私は思う。

ただ、どうやら着ている服装やその所作から彼女がお嬢様なのは間違いないはずで……そのギャップが私には彼女をただの美しいだけのお嬢様じゃなく、とても興味深い存在に感じさせた。

ともかくお友達になりたいなど、私は思った訳だ。

なので、こうして奉仕活動に出向いてニータに会う度に私は彼女に纏わりつき、質問攻めにした。

基本的に無愛想だけれど律義な彼女は私の相手をする度にこうし

て噴火する、けどそうした所で私がにんまり笑っただけだと気が付くと、今度は無然とした顔をぷいっと背ける。

「その表情、かわいー！さすが美少女はどんな表情しても絵になるわぁ。」

「~~~~このっお前はマゾか!!!」

私のそんな茶化しに、顔を真っ赤にするニアは眼光鋭く口は悪くとも、偽りなく本当に可愛い。

口汚く罵られようともますますにやけ顔の私(うーん、これじゃあマゾと言われても仕方ないのかな?)を、子供たちが興味深げに見つめていた。

「アイル姉ちゃん。どうして、この怖いお姉ちゃんをわざわざ怒らせるのお?」

「な!?怖い??」

悪意のない子供の言葉に傷ついたような表情を見せるニアに吹き出す私。

最初は気が重くて仕方なかったローズハウスでの奉仕活動も、今となってはエリーが言っていたようにいい経験だなと思えるようになった。

最初は遠巻きにしか近寄ってこなかった子供たちに懐かれ、大人たちと会話を続けるコツを覚えてきて、本当に遊びと話相手しかしていないけれど、次第にそれが楽しいと感じられるようになってきたのだ。

だけど、それは私がとりたてて何かすごい事をした訳でも、私が人格者な訳でもない。

それはきつと、ここの子供と大人たちが誰にでも寛容な事が要因だと思う。

『私はここを誰もが受け入れられる場所にしたいの』

ユーナさんのローズハウスへのそんな信念が、ここの住人たちにきつと伝わっているんだろうなと思った。

そして、私がここに来ることを楽しいと感じられるもう一つの要因が、この美少女ニア。

彼女は私みたいに奉仕活動で来ている訳じゃなくて、家族がこのハウスにいるから毎週お見舞いに来ているらしい。

そんな彼女とこうして怒鳴られつつも親交を深めていくのが、私の密かな楽しみだったりする。

「あははっ！別に怖くないんだよ。ただ、ちょーっと感情表現が苦手なだけ。そっだ、今日は一緒に遊ぼうか！！！」

「おいっ勝手に」

「わあい！！！」

私が勝手に決めてしまうと、遊び相手が増えたことに子供たちが無邪気に喜び、この反応にニアも怒るに怒れなくなり、真っ赤になりながら私を睨みつけた。

（だけど全然怖くないもんね）

ローズハウスに来る事、今回で5回目。（休みの度に来ているので、初めて訪れてから一カ月以上がたつ）

その度にニアと出会い、纏わりつく度に睨まれ怒鳴られて続けている私である。いい加減、彼女の反応にも慣れて、何となくその扱いにも慣れてきた私である。

こうして美少女ニアに怒鳴られることがローズハウスでの日常になっっている私だけれど、実際彼女との距離が縮み、親しくなったかと問われると否と断言するしかない。

はっきり言って彼女のガードは非常に固いのだ。

多分、私に許していい部分と、許さない部分があつきりしているのだと思う。

質問一つとっても、かんたんに答えてくれることもあれば、きっぱりと言えないと断れることもある。いや、断られる方がかなり多いかな？

きっと彼女に対して興味半分で纏わりついている私を、彼女は本気で鬱陶しがっている。

だけど、根本の部分で律義で優しい彼女は本気で拒否できないんだろうなと…想像するのは難しくない。

それが分かっているなら、ニアに近づくのは良くない事なんだろうとも思う。だけど…と、私は庭で子供たちと戯れながら上方を見上げる。(結局ニアは子供たちと遊ばなかった)

ローズハウスの本館というべき食堂やリビング、住人の部屋がある建物の他に、その陰に隠れるように小さな塔があった。

本館と同じ白い石造りの塔の高さは、三階建ての建物より少し高いくらい。

入ったことはないの、中がどうなっているかは定かではないけれど、あの塔にはたったひとりの住人しかいないらしい。

それがニアの家族…私が初めて彼女を見た時、押していた車椅子に乗っていた人

ニアとその人が親子なのか兄弟なのかも分からず、いくつかの目撃証言からその人が女性だということは知っているけど、ローズハウスにいる理由も、どんな人物なのかも定かではない。(車椅子に乗っている時、私は見ているはずなんだけど、ニアに見とれていて全く覚えていない)

塔には常に鍵がかけられ、その人はほとんどあの塔から出ることもなく、食事も食堂ではとらないので、子供たちの間でも謎の人物として有名らしい。

散歩も普段はしないということで、私が見かけたニアが庭で車椅子を押す姿と言うのはかなりレアな事だったらしい。

(多分、何か複雑な事情があるんだろうけど、なんか変なんだよねえ。)

知り合ってすぐに、とりあえず話題もないのでローズハウスにいるニアに家族のことを聞いた瞬間、彼女の表情が普段の不良バージョンよりも凶暴なものに変化した。

いつものように怒鳴りもせず、静かな声と表情がより一層私の恐怖を増幅させた。

『それ以上私のことを詮索するなら、あんたが誰だろうが容赦しない。怪我をしたくなかったら、何も聞くな。』

いやいや…え？いきなりそんな展開？と特に深い意味もなくした質問に、あまりに強い拒否と威嚇を受けた私は情けないかな半泣きになるほどビビった。

そんな私の表情を見てニアも気まずそうにしていたけれど、それ以降ニアの家族については怖くて質問しようとも思わなくなつた。

だけど、そう思う一方でその頑なさが痛々しく、いつも張りつめ

た様な様子の彼女が気になって、私は鬱陶しがられていると分かっている。それでも彼女に纏わりついている。

（なんか放っておけないんだよね）

多分余計なお世話なのだろうし、放っておけないと言っても彼女に何ができる訳でもないと思うのだけれど、せめて少しでも気がまぎればいいなと思ったりして……

（あはは、何かこれって恋みたい？）

なんて、独り言を心の中で呟いていた頃は気楽だった。

この出会いと彼女に興味を持った事が、私の運命の転機だとも知らなかったのだから。

そして、私の運命は音を立てて動き出す。私の知らない遠いところから、少しずつ。

その日、私は異変を感じていた。

だいぶ慣れたローズハウスへ向かう道は、迷路のように相変わらず入り組んでいて、まだぼーと歩いているだけでは迷いうと思う。その道を白いカッターシャツに膝丈のズボンという、初春らしい涼やかな服装に身を包み、私は気分よく歩いていた。

(雨：降りそうだな)

時刻は正午少し前、いつもならば燦々と太陽の光が降り注いで眩しいくらいだけれど、雲によって太陽は遮られ細い路地は薄暗い。急に天気が悪くなったため、傘を持つてくるのを忘れたことに凹んで、暗い空を見上げて歩きながら大きいため息をついていると、どんと結構強い勢いで誰かとぶつかった。

「うわ！」

転びはしなかったけれど、よろめく視線の先にピカピカの革靴が目に入り、そこから視線を上げると厳つい顔をした大男が仁王立ちしている。

(軍人?)

私は一目見てその男を軍人と断じる。

それはこの男が知り合いという訳ではなく、彼が着てる軍服を一般常識に疎い女学生の私でも知っていたから。

目に眩しいシミ一つない白い生地に、黒と金色の刺繍は贅沢にあ

しらわれ、その腕には<神を信仰しない陣営>の象徴とされる薔薇の花と齒車が絡み合った紋章が刻まれている。

「ごめんなさい。」

ぶつかったのは私がよそ見をしてたせいなのは明らかなので、すぐに謝ったのだけれど、軍人は無言でじろりと頭から足までじろりと見た後、さっさと歩いて行ってしまふ。

それを呆然と見送って、その後に急速に苛立ちが沸いた。

(何よアレ！感じ悪い)

ぶつかったのは悪かったが、謝ったのだからもう少し反応のしようがあるのではないかと憤慨する。

まったく気分が悪いと、その時はただそれだけしか思わなかった。だけど、その後、また違う軍人とすれ違い、今度はぶつからなかったのにもかかわらず、顔をまじまじと見られる。

「失礼しました」

その軍人はこちらが訝しげな顔をしていると、慌てて謝って足早に去って行ったが、軍人がこんな人気のない路地を何人もパトロールしているとは考えられない。

人の顔をじろじろと見るのも、普通に考えてあり得ないだろう。

(誰か探している?)

近くで事件でもあったのだろうかと思いつつも、軍人たちが私の顔を見てもスルーしていくことから自分に関係ある事とも思えなかった。

よって、さつさと頭の隅にその事を追いやろうとしていた矢先、ローズハウスに入った途端、異様な雰囲気施設内を覆っていることに戸惑う。

いつもはのんびりした中にも子供と大人の笑い声が絶えないリビングに、今は何人かのスタッフしかおらず、そのスタッフたちも一様に暗い表情を浮かべている。

「こんにちは…わ？」

挨拶も語尾に疑問が滲み、何かを相談しあっている彼女たちに私の声は気付かれなかったようだ。

話しかけられる雰囲気でもなく、立ち尽くしていると、やっとレイチエルさんが私に気が付く。

彼女はその顔に笑顔を浮かべたが、それはいつもの澆刺とした明るいものではなく、すこし苦しそうに歪んでしまう。

「あの…何かあったんですか？」

「うん…実は一人ローズハウスから出ていってしまった人がいて帰ってこないのよ。」

「え!？」

重苦しい空気に包まれていた中で驚きの声は大きく響き、私は思わず口を押さえた。

どくどくと不自然に心臓が鳴りだす。

「じ、ごめんなさい。」

まさか、私がすれ違った軍人たちはその人を探していた?と思いが当たる一方で、こう言っただがここで暮らしている一般市民が行方不明になっただくらいで軍が動くということに違和感を感じた。

軍は普通、一般市民が関わるような事件では出動することはない。普通は憲兵の類がそれにあたるはずだ。

「えっと、それで誰が？大丈夫なんですか？」

感じた違和感はとりあえず置いておいて、私は誰かがいなくなつたという事実には若干パニックに陥っていた。

『じゃあ、いつてくるわね』

声と共に遠ざかっていく背中が脳裏をよぎり、私は大きく首を横に振った。

「アイルフィーダ？落ちついて？」

レイチェルさんが明らかに様子のおかしい私を心配するように覗きこむ。

自分でもこんなに落ちつかないのは変だと分かっているにもかかわらず、

「それで誰なんですか？私、探しに行きます。」  
「そ、それは」

ともかく落ちついていられなくて、問い詰めるように聞くけど、不思議とレイチェルさんもいい淀む。

そうだ。軍が出張っているくらいなのに、ここのスタッフは誰ひとりその人の捜索に出ている気配がない。

やっぱり何かが変だと思うけれど、それよりもとにかく私はその人を探しに行かなくてはと、自分で自分を追い詰めていた。

「早く教えて」  
「私の家族だ。」

迫る私に気圧されていたレイチエルさんに代わって、背後から静かな声がかかりはつと振り返る。

そこには相変わらず愛らしい容貌に、鋭い眼光を宿した美少女が立っている。

「ニア：貴方の家族が！？じゃあ、早く探しに…」

塔の中に閉じこもっている人間がどうして急にローズハウスを出て行ってしまったのか、そんな事を冷静に考える理性はこの時の私には全くない。

ニアが急に現れた事にも驚かず、ただ、与えられた情報に飛びついて私はレイチエルさんから身を翻すと玄関に駆けだす。

だが、それに立ち足はだかる様にニアが前に立った。

「何！？」

止められたことに思わず苛立って声を上げた。

どうも様子がおかしいと、リビングで相談事をしていたらしいスタッフたちが私たちの周りに集まり出す。

「お前が探しに行く必要はない。既に軍に行方を探させている。」  
「だからって数が増えて困ることはないでしょ！？」

言いながらニアの横を通ろうとすると、彼女はまた私の進路を遮る。

「あの人は最近はなかったが、少し前まではこういうことが良くあ

った。大体、少し歩くだけで足が覚束なくなるような人だ。いつもすぐに見つか

「だから、心配して探すこともしないの？そんなのおかしい!!」

ニアの首を突っ込む事を許さない強い口調の拒否にも、今日の私は負けなかった。

彼女より強く声を上げて、ニアが僅かに眉を顰めるのを見ても彼女に対する憤りしか感じなかった。

「いつも見つかるからって、それが今回もだとは限らないじゃない!! 誰かがいなくなるって、貴方が思うよりずっと簡単で、あつという間なのよ?!」

自分で何を言っているか良く分からなくなっていた。

そして、再び過る誰かの背中が遠ざかっていくイメージがちらつく。

(駄目! 思い出したら駄目!!)

この時の私の頭を占めていたのはニアの家族ではなく、消えることがない焦げ付いた私の絶望と不安。

「何を言っている? とかく、落ちつけ! お前が何のことをいつているのか分からないけど、大体お前はあの人の顔も碌に知らないのにどうやって探すつもりだ?」

「それはっ」

理詰めで言葉を続ける彼女に返す言葉もない。

私を心配して周りに集まってきたレイチエルさんをはじめとしたスタッフたちも、彼女の言葉にうんうんと頷いて私が落ち着くよう

に促してくる。

(落ちついて私…大丈夫、落ちつ…)

私だって落ちつきたい。

だからこそ、彼女たちが促す通り落ちつくべく大きく息を吸おうとした瞬間、声が頭の中に響く。

『落ちつけ。アレの事だ。どうせまた自分を心配してほしいだけに決まっている。探しに行くだけ無駄だ。』

思い出したくない無情な声に吸った息が、ヒュウと変な音になり、吐き出せなくなる。

ヒュヒュと苦しい呼吸に胸を押さえる。

汗が噴き出て、心臓が大きく鳴る。

「おい！しっかりしろ！」

苦しさに蹲った私の背中に添えられたニアの手を撥ね退けた。

「もういい！！ともかく、私は探しに行く！！」

「なっ！」

「私、じつとしてられない！！」

ニアの言葉が返ってくる前に気が付けば、私は走り出してロズハウスを飛び出していた。

背後から私の名を呼ぶ声が聞こえても振り返らない。

呼吸が苦しくても、探す宛ても、探す人の顔も知らないのに我武者羅に走った。

私はともかく、誰かがいない事の不安を感じたくなかった。帰っ

てこないかもしれない人をただ待っていたなくなかった。

『すぐ帰ってくるから、待っていてねアイル。』

かつてそう言って私を置いて行った人がいた。彼女はそのまま今も帰ってこない。

ニアの家族を捜すというよりは、彼女の幻影から私は逃げ出したのだ。

その後、どこをどう通って、どのくらい走ったのか定かではない。

「はあはあはあ」

全力疾走のために酸欠の頭では何も考えられず、私が感じるのは繰り返される自分の荒い呼吸だけだ。

それでもローズハウスを飛び出た本当の目的を忘れないでいたから、走りながら視線は歩く人を追った。

ただ、私が走った場所が悪かったのか、はたまた、雨が降りそうな天気災いしたか、出くわした人は少なく、その全ては男性。

ニアの家族の数少ない情報によると、その人は女性だったはずだ。

さらにローズハウスに行くまでにすれ違った軍人とも会わない。もしかしたら、もうニアの家族は見つかったのかもしれない。

衝動でローズハウスを飛び出たが、次第に理性が戻ってくる感覚を覚えながら、冷静にそんな事を考えたつつ、私はやっと走る足の速さを緩めた。

「あれ…どこ何処？」

ただ我武者羅に走ったのがいけなかったのだと思うけど、全然見覚えのない町並みしかなくて途方に暮れた。

しかも、ぽつりと頬に落ちる冷たい感触。

「え、嘘？」

数滴ポツリポツリと落ちてきた後、堰を切ったかのように大雨が滝のように降ってきた。

それで完全に頭が冷えたのか、情けないかな私はオロオロと急にうるたえだす。

(ともかく、どこかで雨宿りしないと！)

傘も持たずに飛び出たため、着衣は薄着だったこともありすぐに水を吸ってべったりと張り付く。

きよるきよると辺りを見回して、ふと民家だけれど屋根が張り出していて雨宿りするのに良さそうな場所を見つけて私はそこに再び駆けだそうとした。

「馬鹿野郎！」

と、いきなり怒鳴られて、誰かに強く手を取られ引っ張られた。

「え？えええ？ニア！？」

後ろを見上げるようにするとそこには私と同じく濡れ鼠になったニアが、怒った顔をしていた。

驚いた私をニアは無言のまま、雨を避けるため民家の軒下に引  
つ張っていく。

無言の背中が怒っているのは間違いなく、私はどうしたものかと  
途方に暮れる。

(バカヤロウ…って初めて言われた)

元々他人と大喧嘩することもない気性なので、面と向かってあんな  
風に怒鳴られたことは一度もなかった。(マリア教師のお説教は  
除外)

それを怖いと感じつつも、何となく新鮮な気持ち胸に過る。

(心配してくれたんだよね?)

多分、飛び出した私を心配して追ってきてくれたニアのその気  
持ちが嬉しくて、私は無言のまま背を向ける彼女を見る。

そこで初めてニアが自分よりも頭一つ分は背が高い事に気が付  
く。

ニアは平均的な女性と比べても、きつとかなり背が高い部類に  
入るのだろう。スタイルがいいので、そんなに背が高いとは思わな  
かったが、こうして手を繋いで近くにいとそれを改めて実感した。  
ほどなくして軒下に到着すると、やっととめない雨粒から逃れ  
ることが出来て、ほっとすると同時に急に張り付くシャツが不快に  
感じられ、雨に奪われた体温のせいで寒気が体を走る。

思わず愚痴の一つも出そうになって、ニアが沈黙したままで、  
そんな事を言える雰囲気ではないと気が付いて飲み込む。

代わりに何はともあれ聞いておかなくてはならないことを確認す

る。

「ニアの家族は見つかったの？」

彼女はちらりと私の方に目をやったが、すぐに顔を逸らす。かなり怒っているようで、僅かに顔が赤い。

「ああ、お前が出ていったのと入れ違いくらいのタイミングで、見つかったと報告が入った。」

「そう良かった。」

それが聞いてとりあえず安心して、次に私は勢いよくニアに向かって頭を下げた。

「ごめんなさい！私が勝手に怒鳴って、出ていったせいでニアに余計な面倒をかけました！」

「まったく。良く分からないことを喚いてお前が出ていったせいで、私が悪者だったんだぞ？」

私ではなく正面を向いたまま、ニアが顔をしかめる。

「へ？どういう意味？」

「レイチエルを始め、私が冷たいからお前が傷ついて出ていったんだから、私が探しに行くのが道理だと散々責められた。」

その言葉にぎょっとして目を見開く。

「いやいやいやいや！あれは私が勝手に逆上しただけで、ニアが悪いことは一切ないよ！！寧ろ私が謝らないといけないくらいだし。」

「

言葉は段々尻つぼみになる。

思い出すだけで数十分前くらいの自分の物言いや行動が恥ずかしくて、どうしようもなくなつて縮こまつてしまう。

だけど、一見するとあの時の私とニアの喧嘩は、ニアが私を突き放して私が逃げ出したように見えたんだろう。

そのせいでレイチエルさんたちに責められて、こんなところまで私を追いかけてくることになつたニアに本当に申し訳ない気持ちになつて頂垂れる。

「まあ、私も言い方がきつかつたし、お相手つて事にしないか？」

「でも、それじゃあ」

どう見ても悪かつたのは私だ。

「お前は私の家族を心配してくれたただだし、結果はともかく、謝つてもらつたようなことは何もしてないだろう？別にすぐにこうして捕まえられたし…な？」

顔は正面を向いたままだけど、視線だけこちらに向けて照れたようなニアの笑顔。

(わ！笑つたの初めて見た！！)

何かもう可愛いとしか言いようのないその笑顔に、妙なテンションが高まるのを感じる。

そんな私の様子に訝しげな表情を浮かべるニアとニマニマしてしまう私は、その後雨が止む少しの間だけ、特に会話はなかったけれど穏やかな時間を過ごした。

何故だかどんな質問に答えてもらった時よりも、彼女との距離が

少しだけ近づいたような気がした。

雨が止んでとりあえずローズハウスに戻ると、レイチエルさんたちが安堵した顔で私たちを出迎えてくれた。

彼女たちにも心配をかけてしまったと、ひとしきり謝る私に怒った様子もなくみんな一様に私に何事もなかったことを良かったと優しく言ってくれる。

何だか泣きたくなるような温かな気持ちになった私だけど、ふいにかけられた問いかけに体が固まった。

「でも、どうしてあんな急に怒り出しちゃったの？」

「そういえば、とりあえずニアちゃんが悪いんだと決めつけちゃったけど、良く考えればそういう会話じゃなかったわよね。」

何気ない言葉だろうけど、その言葉に私は声が出なくなるのを感じた。

これだけ迷惑をかけたのだから、ちゃんと理由を話すべきだし、ニアを一方的に悪者にしたままではやはり駄目だ。

ごくりと唾を飲み込んで、その問いに答えようとだけど、急激に襲ってきた緊張に喉が渴いて言葉が出てこない。

「あ……」

「それよりとりあえず着替えとかないか？ 私たち、ずぶ濡れでこのままじゃ風邪をひく。」

隣にいたニアの言葉に、レイチエルさんが大きな動作で慌てだ

す。

とりあえず大きなタオルを借りているけど、私たちは全身がずぶ濡れでタオルだけではとてもじゃないけど、乾く状態ではなかった。

「本当！そのままじゃ風邪ひいちゃうわね。ついでだからお風呂も入って温まりなさい。女の子二人くらいなら一緒に入れる広さはあるし、いつでも入れるように準備しておいたの！」

そう言っつていつもの彼女に戻って澁刺とした明るい笑顔で私たちの背中を押す。

「風呂！？私はいい！！着替えだけ貸してもらえればっ」

「何言っつているの！こんなに顔も冷たくなっているわよ？もう準備万端なんだから、それを無駄にしないで頂戴。」

何故だか急に焦りだしたニアアの頬を触って大げさにリアクションをして、有無を言わせずレイチェルさんは私たちを浴室に押し込むと、着替えをとっつてくると行っつて出ていった。

取り残された私たちに何故だか微妙な沈黙が落ちた。

ローズハウスの浴室に入ったことはないが、住人が何人か一緒に入れるように脱衣所も広々としている。

たくさんタオルや子供たちの玩具があり、ここで住人達が生活をしていることを感じさせた。

私は体が冷え切っつているし、お風呂に入れるのは正直ありがたいので、扉の方を向いたまま固まっつたニアアを不思議に思いつつ、濡れた服を脱ぎながら話しかけた。

「ニアア、さっきはありがとう。」

「あ………！？」

問いかけた私を振り向いた瞬間、ニーアは思いつきり顔を背ける。

「どうしたの？」

「い、いいいいや何でも！っていうか、ありがとうって何だ？」

「さつき、私が言いくいのに気が付いて話を変えてくれたでしょう？助かったよ。」

「まあ、誰だって言いたくないことの1つや2つはあるから、は、ハハハ」

乾いた笑い声と、急に焦ったような様子のニーアは未だに洋服を脱ぐ様子はない。

「ただ、洋服が濡れて透けてしまっただ着の線どころか色まで分かってしまう。(ニーアは清楚な水色だ)」

何処となくいつもと違う様子のニーアを観察しながら、私は女同士と言えども、お嬢様の彼女は誰かと一緒に風呂に入るという習慣がないから照れているんだという結論に達した。(ちなみに私は寮で共同風呂なので全く抵抗はない)

しかし、彼女も私と同じ状態なのだし、やはりお風呂に入った方がいいに決まっている。

私はとりあえずシャツとズボンを脱いで下着姿になると、彼女の背後から洋服を脱がせにかかった。

「な！何をっ?!」

「だってニーア、全然洋服脱がないじゃない！服着たままお風呂は入れないよ？」

背後からまるで私に襲われるようになった形になって、暴れだすニーア。

真っ赤になって焦る様子は普段の彼女とは全く違って面白い。

「私は風呂には入らない！！レイチェルが持ってきてくれる服に着替えるだけだ！！」

「何で？折角だし一緒に入ろうよ？」

「はいらな　おい、待て！！本当に脱がすな！！」

抵抗は驚くほどに激しかったが、幸いに今日彼女が着ていたのが後ろにチャックのあるワンピースだったこともあり、背後からさつさとチャックを下げていたので、脱がすのは結構容易だった。

パサリとワンピースが落ち、その瞬間ニアの抵抗が最大になる。彼女の背中に張り付くようにして服を脱がせにかかっていた私は、その瞬間バランスを崩しニアに凭れかかってしまう。

そのせいでニアの体がぐらりと揺れて床に私ともども倒れこんだ。

『うわー！！』

二人の人間が倒れこむ音が響き、冷たくなった肌と肌が触れ合う。私はニアが下敷きになってくれたおかげで何処も痛まなかったが、下敷きにしてしまった彼女は自分の重みで痛いに違いない。

「うめ　」

急いで起き上がり、ニアに今日何度目かになる謝罪の言葉を途中で私は言葉を失った。

私は今、どういう風に倒れたかは定かではないけど、仰向きに倒れ込んだニアに馬乗りになる形になっている。

起き上がった私は真っ赤になって言葉を失っているニアと一瞬だけ視線が合い、その後、彼女の体に釘付けになった。

濡れた服の下から透けていた水色のブラ、それが包んでいるはずの柔らかい胸…のあるはずの場所から目が離せない。

言っておくけど、それは私が同性にそういう興味があるとか、そんなんじゃない。

(ない！)

何が『ない』かといえば、女性ならば大小の差はあれど、誰しもが持っているはずの胸の膨らみ。

それがニアには皆無で、代わりに明らかに胸板だとかいえない筋肉の上にボールのようなものが胸の代わりになっていてブラがそれを包んでいる。

胸が今まで出会ったどの女子よりもないという事実にも、一瞬、ありえない想像が頭をよぎる。

(ニアはもしかして…いいや！これはいまはやりのパットの類に違いない！)

胸のポリウムを出すための偽乳の存在は女学生の間では結構メジャーだ。

それとは明らかに違うと思いつつも、私は無理やりそう自分に言い聞かせた。

この時の私は本当にパニック状態だったのだ。

慌ててとりあえずニアから離れなくては、そして、自分のありえない想像を払拭して一緒にお風呂に入らなくてはと、立ち上がるうとしたけど力が入らず、とりあえず後退して体をどかそうと後ろに手をついた。

「うわあ」

「きゃあ」

その瞬間、手に何か柔らかい感触とそれまで茫然自失していたニ

「アが叫んで急に立ち上がり、彼の腹部に乗っかっていた私は床にごろりと転がった。

床は脱衣所と言うこともあり、固い素材ではないので私はすぐに座り込んだまま体を起こし、そして、すぐ傍に立っていたらしいニアのちょうど股のあたりが目の前に来る。

「き……」

そして、それを見た瞬間に喉の奥から、今まで自分でも出したことのないような悲鳴が押しあがってくるのを感じた。

(な…なんなのよ、この膨らみ!!!)

羨ましいくらいに白くて細い御足よりも、私の思考を奪ったのはブラとお揃いらしきショーツに包まれた女性にはない膨らみ。

頭は真っ白になったけれど、たった一つの事実が明確になって私を襲った。

男!!!

その答えに辿りついた瞬間、私は押しあがってくる悲鳴を吐きだそうとして、それに気が付いたニアに口を手で押さえられた。

「ま…まで！これには事情があるんだ」

「ん〜!!!」

女子になりすましていた男子にどんな事情があるかなんて、この時の私の知ったことじゃない。

ただ、美少女だと思っていた相手が男で、今二人は互いに下着姿でこんなに近くにいて、もう何が何だか分からなくて、ただただ混

乱するしかなかった。

実はこの女装美少女（いや、美少年になるのかな？）ことニーアが、後に私の夫になる世界王フリーだなんてこの時の私には全く想像できない事であった。

## 1 - 6 (後書き)

何だか色々すみません！途中から丸わかりだったとは思いますが、美少女ニアこそが、将来の世界王陛下だった訳ですが…一応、理由があつて女装しています。決して趣味じゃないですよ、下着は女物着たりして本物志向ではあるようですが(笑)見た目は完全に美少女、心は普通の男の子！

なんか序章と違って変なラブコメみたいになつてしまいましたが、第一章はこれにて終了。次はまた現在に戻ります。話の形態としてはしばらくは現在と過去を交互にしていこうと思つています。次は思いつきりドロドロです！

昔々、大地は命が育まれることのない死の大地だった。

その大地に神が恵みを与え、動植物が息づき、人間が生まれた。

人間は神を敬い、神もまた人間を慈しみ、その中で一人の女性に神の血を引く子供を授けた。

神と人間の血を引く子供、それが初代世界王レインバック・  
ヴァトル

彼は神と同じ、金の髪に青にも緑にも見える澄んだ瞳、そして、その左胸には神の子の証である太陽の紋章が刻まれていたという。

以後、彼の血を引く世界王は代々、同じ髪と瞳の色を有し、そして必ず太陽の紋章がその左胸に刻まれている。

「太陽は私たちの神の本当の姿だと言われ、光と命を象徴しています。太陽の紋章が刻まれているという事は、世界王が神の力を身に宿している証拠とされています。」

(左胸：そういえば何か紋章みたいなものがあつた気がする)

とはいっても、夫：もとい世界王フィリーの紋章を見たのは、彼がまだニアと言う名の少女の皮を被っていた頃。

彼を女の子だと思いこみ服を脱がせたあの時だけだ。

最近、昔の事ばかり考えているので、もう十年くらい前のこと

ただどすぐに思い出せた。

(まあ、あんな強烈な事そうそう忘れられないし)

男性に対して免疫がない訳では無かったけれど、女の子だと思っ  
込んでいた相手が男だったのだ。驚くなという方が無理。

(あの後も大変だったんだよねえ)

「オホン！聞いていらっしやいますか？」

更に過去に意識を飛ばそうとしていると、ずいっとファイリーンの  
化粧の濃い顔が目前に迫って、私は咄嗟に体を引く。

「は…はい」

目つきが怖い彼女相手に、大人しく返事をするとき大きくため息を  
つかれる。

私は今、ファイリーンから神のことについて講義を受けていた。

<神を信仰しない陣営>の私は当然神の事など大して知らずに育  
っているけれど、世界王の妻となったからにはそう言うてはいら  
ない

詳しく知らなくとも一般教養くらい知識は身につけると、ファ  
イリーンから今日も今日とてスパルタを受けていた。

とはいいつつも、ここ数日はこんな風に過去に思いをはせること  
が多くなり、講義にも丸つきり身が入っていないので、彼女がど  
んなにスパルタだろうと何一つ知識として実になるものはない。

その事を申し訳なく思っている、やはり、暗にでるなと言われ

た舞踏会のために必死で練習することなどでできず、ファイリーの様子から考えてもこれからずつと何を勉強しようとも、それが役立つ日が来るとは思えない。

結果として本当にやる気のない私が完成してしまったのだ。

最初はそんな様子の私に口酸っぱく小言を言ったファイリーンも、何を言われても平然としている私に何も言わなくなった。

ただし、彼女もここで講義をするのが仕事なのでその役割は果たしてくれているし、私もそれを放棄することはしなかった。

何しろファイリーンの講義がなくては、私は日がな一日、何もすることがなく後宮に引き籠もっているだけになってしまっから。

例えそれが昔から苦手な勉強や、身につかない礼儀作法であったとしても…どんな形でも他人と関わらず自分の殻に永遠に閉じこもっていても、私は生きながらに死んでしまうだろう。

そんな暗い考えを頭の中で何度も繰り返しては、鬱々とする日々が日常となりつつあった。

「えっと、一つ疑問に思ったのだけれど聞いてもいいですか？」

小言を続けるファイリーンを気にすることなく、私はふと今の講義で気になった事を口にした。

「あら、質問なんて珍しいですわね。どうぞ？」

「神、神っていうけど、貴方達の神の名前はないの？」

彼らの信じているのが唯一神であり、その他に登場する神がいないから、神と言えば『神』しかないのだろうけど、神にだって名前くらいあるだろう。

そう思っただけで、私の問いにファイリーンはきょとんとして首を傾げた。

「名前…ですか？私は知りません。というか、恐らく神に名前はな  
いように思いますわ。神は神ですもの。」

貴族のお嬢様然としているファイリンだけど、その知識はそこ  
らの博士を名乗る人より上だと聞いている。（自称だけれど）

それもかなりの書痴で、様々な知識に精通しているらしい彼女が  
こういうのだから、実際に神に名前は無いのだろう。

別に元々大して興味が無いことなので、ふーんとしか思いようが  
なかったけど、何となく気になる。

「では、神についてはここまでにして、次はダンスの練習に入りま  
すわよ！！」

何故だか私のやる気の無さを感じ取っているはずなのに、それに  
比例してダンスに対してだけは彼女のやる気は上昇する一方だ。

前はそれに反発したり、対抗意識を燃やしていたけど、最近の私  
は本当に何も感じなくなりつつあった。

「ダンスはいいです。それより神の話をもう少し聞かせてもらえな  
いでしょうか？それともし神について私でも読める本があったら貸  
してもらいたいのですが。」

「どうしてですか！？」

とたんに目を吊り上げるファイリンに、私はぼんやり笑って見  
せた。

「ファイリンの話がとても興味深かったから、もつと知りたいと  
思っただけ。それに私、＜神を信仰しない陣営＞の人間じゃないですか  
？早くここに慣れるためにも、色々知りたいんです。お願いします。」

「ファイリーンは傲慢なお嬢様っぽいけど、勉強しようという意欲を見せると、それがどうやら嬉しいらしいと知ったのはここ数日。」

「…まあ、それならば仕方ないですわね。」

怒ったような素振りを見せつつも、顔は微妙に笑っている彼女が微笑ましい。

多分、彼女は師として仰ぐのには十分な人物なのだと、彼女の見方が私の中ではかなり変わりつつある。

嫌みや挑発の応酬さえないように私が心掛ければ（ファイリーンからあっても、それを返す気力が今の私にはない）、彼女と付き合うことは大きな苦痛となる事はなかった。

「ですが、分かっているのですか？誕生祭は3日後、もう時間がないのでしょ？」

その言葉には答ええない。否、答えられない。

本当は言ってしまうばいいのに。

『陛下から舞踏会には巫女様をパートナーとすると言われた』

そう言えば、ファイリーンだってこんな風にダンスダンスと言わなくなる。

だけど、私はまだそれを告げれずにいる。

言ってしまうえばそれを認めることになる…往生際悪く、私はまだ自分が王妃としてすら認められていない事実を受け入れられていないんだ。

そんな自分の諦め悪さが、底意地の悪さが憎い。

いつかは認めなくてはならない、いや、それより先に現実がそれを認めざるを得ないように私を追い詰める。

だけど、そうなった時、私は自分が大きく壊れてしまうような気がして、怖くて自分でそれを認められないのだ。

妻としての存在が疎まれてるのは分かっていたから、せめて、王妃としてこの場所にいる意味が私の支えだったのだから。

## 2 - 1 (後書き)

短めで申し訳ありませんが、第二章開始です。

鬱々としたアイルフィードに更なる試練、最大のライバルが登場する予定です！ドロドロの予感（笑）

ここまで読んで下さった皆様、お気に入り登録・評価をして下さった皆様のおかげでポイントが1000を超えました！私としてはすごい快挙すぎて、本当に感謝の気持ちでいっぱいです！ありがとうございます！ございました！

拙い作品ではありますが、また感想やご指摘を頂ければ大変励みになります。あまり心が強くないので、お手柔らかにお願いしたいですが、是非よろしくお願いします！

ファイリーンは講義が終わった後、すぐにお問い合わせした本を手配してくれたらしく、ルツティから寝る前に本を渡された。

古く使い込まれているが立派な造りで分厚い本は、綺麗な挿絵も多く、ぱらぱらとめくった印象では神に纏わる伝説などを集めたものようだ。

あまり堅苦しい内容ばかりでなく、これならば私にも読めそうだし、時計を確認するとフリーがいつも来る時間よりまだ大分早いで、行儀が悪いとは思いつつもベッドに寝転がりながら本を読みだして数分後、

「アイルフィーダ様。陛下がお渡りでございます。」

ルツティからそんな声がかかって慌てる。

最近、特にこちらに来るのが遅いと思っていたから油断していた。急いでベッドから飛び出ると本を片づけて、シーツの皺を伸ばし、鏡を覗きこんで変なところがないか確認する。

最後に深呼吸一つして、数十秒後、ドアが音を立てて開くと同時に頭を下げる。

「おかえりなさいませ」

まあ、どんなに慌てて色々整えたところで、何かが変わる訳じゃない。

後は彼が私を抱きしめて、あの言葉を言って寝るだけ。

この間までは辛くてもまだ、その辛さに甘さが伴っていたことが、今となってはただの苦痛に過ぎなくて私はさっさとすんでくれればいいと、立ち上がったまま動かない。

だけど、今日は彼の方から、いつもとは違うアクションが起こる。

「今日はこれを君に。」

そういつて机に結構大きい箱を置く。

白い箱に金色の豪華なりボンが掛けられたそれは、見るからにプレゼントだ。

『君に』と言われたことから、私宛のプレゼントと言うことになるのだから、そんなものを貰うとは予想したことがなかったの  
で驚く。

そのままどうにも現実を受け入れられない私に、フィリーの方が  
しびれを切らして、机に置いた箱を私に直接押し付けてくる。

「ほら」

「あ、はい。えっと、ありがとうございます。」

中身が何かは分からないけれど、大きい箱を両手に抱えてとりあ  
えずお礼を言う。

箱は大きさの割に軽い。

(?????)

私は疑問符を頭の上に何個も飛ばす。

プレゼントを貰う理由と状況が分からない。

更にはそもそも実はこれがフィリーから貰う初めてプレゼントで  
あると思いついて、嬉しいやら戸惑うやら、どうも反応に困る。

そのまま固まっていると、フィリーがまだこちらをじっと見つめ  
たままなのに気がつく。目が合うと、不機嫌そうな顔で一言。

「開けないのか？」

「あ、はい！」

なるほど、わざわざ手渡ししてくれたプレゼントをすぐに開けないというのは、失礼というものかもしれない。

慌てて抱えたままだった箱を机に置いて、光沢のある高級そうなリボンに手をかけて、自分の手が震えているのに気がつく。

(えええ？私、嬉しすぎて震えてる？)

咄嗟に気が付けていない感情を体は正直に表しているようで、顔の表情筋も笑いたいのに笑えないらしく、微妙にひくついているのに気が付く。

震えるくらい嬉しいのだけれど、照れているのと、その感情をフリーに知られてドン引きされるのが怖くて、理性が色々なことを制御しようとしているのに制御しきれていない…そんな感じ。

そんな自分でも呆れるくらい面倒くさい感情に閉口しつつ、ともかく、何でもないふりをしてどうにか箱を開けた。

「…………ドレスですか？」

かくして、箱の中から出てきたのは、光沢のある柔らかそうな素材の布地。

見るからに高級そうで、箱を開いたはいいけれど触れるのにも躊躇ってしまう。

後宮に入ってから、ドレスと言われる類の服を日常着として着せられてきているが、着慣れていない上に、平凡な容貌にドレスが似合わないのも十二分に理解しているので、私はドレスと言うよりはなるべくワンピースに近いものを好んで着ている。

そもそも、神を信仰しない陣営で一般的な服装は、基本的にシ

ンプルで簡素、更に女性もズボンを履くことが当たり前なのに対し、  
<神を信仰する陣営>においてはそれは野蛮とされる。

ここでは上層階級の女性ならばドレスを着ることが当たり前で、  
それが豪華であればあるほどステータスであるとされている。

私も王妃として様々なドレスを用意されているけれど、そのどれ  
もフリルやレースをこれでもかという程使用され、輝く宝石やビー  
ズがそこかしこに付けられている。

正直、全く趣味でないというのが本当の所で、確かに綺麗だと思  
うけれど、それが似合う似合わないは別問題。

平凡で貧相な私には、そういった飾り立てられたドレスは基本的  
に似合わないと誰もが分かりそうなものを、これが王妃として正し  
いドレスだと押しつけられる。

でも、やっぱり似合わないから着たくなくて、結局は実家から用  
意してきたワンピースばかりを着てきた。(その度にファイリーン  
には馬鹿にされたけれど)

だから、ファイリーがプレゼントしてくれたのがドレスだと察して、  
嬉しいと思う反面、それを着こなせるか全体像を見る前から非常に  
自信がなく、心が萎えた。

おかげでドレスが入った箱を前に、私は再び立ちつくす。

「出さないのか？」

「は、はい、いえ、すぐ!!」

そんな私にじれったさを感じたのか、再びファイリーが口を開く。

それは敢て疑問形にするのも不自然なほど、明確な命令形で、私  
は急かされるようにドレスを箱から取り出す。

さらりとした涼やかな布が音を立てて、寝室の柔らかな光の中に  
金ともベージュとも言えぬ色が煌めいた。

全貌が明らかになったドレスを見て私は一瞬息をのむ。

(綺麗…)

そのドレスは私がここにきてからイメージしてきたドレスとは違  
った。

細身のAラインのドレスは、スカートの部分はフワリとしている  
が、だけれどフリルやレースではなく、絶妙なバランスで布をまる  
で花卉のように縫い合わせており、更に細かな刺繍によって派手で  
はないが繊細で美しい模様が描かれている。

シンプルで露出が少なく、更に気品があって美しいドレスに、あ  
まり洋服に興味のない私も胸が高鳴った。

思わず声が出ないくらい見とれていた私だけれど、フィリーはそ  
れを悪い方にとっただけらしい。

「気に入らないのか？」

その言葉にはっとして、とりあえず首を横にブンブンふる。

「いいえっ…あのとでも素敵だドレスで気に入りました。」

本当ならばもっと感情をこめて喜びをアピールする所かもしれな  
いけれど、どうにも照れが先行してしまい言葉は酷く他人行儀なも  
のになった。

あまり喜びすぎてフィリーに引かれるのもやはり怖い。

幸いに私の不器用な喜び方でも、彼は幾分か不機嫌な顔を緩めて  
くれる。

「なら良かった。こっちのドレスはメルト・ファウスト育ちのお前  
の感覚では抵抗あるだろうから、そういうドレスなら気に入ると思  
った。」

「えら・んでくれたの？」

フィリーの言葉に信じられないような気持で問うと、彼は顔を歪めた。

「昔からお前の服のセンスは正直言って質素すぎるんだ。今度の誕生祭であんまり貧相なものを着られても困るからな。」

そういつて悪態をつかれても、今日は堪えない。

だって、それって要するにこのドレスを選んだのがフィリーだと認めたとということ。

ただでさえ綺麗だと思ったドレスが、ことさらに大切に思えて私は言葉詰まらせた。

こんなことでこんなに喜んでしまうなんて、今の自分の弱さと言うか、妙な感受性の強さに、馬鹿だなと思う。

更にさっきまでは単語だけでまるでロボットの様に言葉を発していた彼が、昔までとは言わないけれど私と会話をしてくれることも嬉しかった。

フィリーの行動や言動に、こんなに一喜一憂するなんて大人にでもなつて、学生の頃と私は何一つ変わらない。

だけど、今はその言葉に喜びを感じていたかった。

「ありがとうございます。」

でも、それはフィリーにとってはきつと重荷にしかないだろうけど、せめて感謝だけはちゃんと伝えたいと、久しぶりに彼の眼を見てお礼を言った。

それが多分、珍しかったのだろう。

フィリーはただでさえ大きな瞳を更に大きくさせて驚いた表情を浮かべる。

(こつこつという顔をすると、昔と変わらない。)

今となつては美青年と言つても差支えないだろうけど、私から言わせると美少女だったころの面影が消えないはまだ。

今だつて女装させたら、体格的な所はどうしようもないけれど、少なくとも私よりは美女になるに違いないと確信している。

そう思うと何だか笑えてしまつて、気が付くと小さく吹き出してしまつた私を見て、何か不機嫌にさせてしまつたのだろう。フィリ―が何かを我慢するように顔を背ける。

(あ…)

それを見て、嬉しくて高揚していた気分が急速に萎んでいく。

何が気に障つたのか分からないけれど、それまであつた和やかな雰囲気が一気に霧散して、いつもの重い沈黙が私たちの間に戻る。

そして、沈黙に耐えがたさを感じたのか、フィリ―は何の脈絡もなく唐突に

「愛している」

そう言つて、いつも通りドレスを持つたままの私を抱きしめてベッドに入っていく。

それをいつも通り何も言えないまま私は見送る。

(私は何を間違つたのかな?)

そう心の中で問いかけても、あたりまえだけど誰も答えてはくれない。

私が今できるのは、せめて先程の楽しい名残を抱きしめるように、もらったドレスを抱きしめることだけだつた。

## アイルフィーダ

それは神の子を宿した女性が愛した伝説の花

何気なく目に入ったページに自分の名前があった。

フィリーからドレスを賜るといふ珍事の翌日、ファイリーンの講義も今日はなく、午前に誕生祭での注意事項をルツティと確認してからは特にやることも無く、ぼんやりと過ごしていた午後。

ファイリーンから借りた本を暇潰しに読んでいた私は、自分の名前にそんな意味があることを初めて知った。

「ルツティ、私の名前って花の名前だったのね。」

やることも無いのに、傍に控えてあれこれと世話を焼いてくれるルツティを振り返ると、彼女は優しく笑顔を浮かべた。

「ご存じありませんでしたか？こちらでは女の子の名前として少ない名前です。」

「うん。」

本には花の絵も描かれている。

白にうっすらと青を乗せたような色で描かれている花は、見た目

は薔薇のようだけれど、薔薇よりも花卉が多く柔らかい感じで描かれている。

「アイルフィーダは想像上の花なの？」

「はい。実際にはない花です。伝説によりますと、神が悪魔の毒に苦しんだ時、アイルフィーダの不思議な力によってその毒は癒されたとか。以降、アイルフィーダは神、ひいてはその子孫である世界王を支える巫女の象徴とされておりませう。」

その言葉を聞きながら、私は本に描かれたアイルフィーダを指でなぞる。

（巫女の象徴：彼女にならこの花もよく似合う）

自分と同じ名前の花というにはあまりに可憐な花が、『彼女』の象徴であると聞くと途端にしっくりとくる。

そのことに凹みながらも、表にはおくびにも出さず本を読み進めていると、部屋の外から誰かがドアをノックする。

ルツティがそれに対応すると、彼女は戻ってきて私に告げた。

「アイルフィーダ様。巫女がお会いしたいと仰っておりますが、どうされますか？」

聞き取りやすい声でゆっくりと告げられた言葉。

だけれど、その言葉を頭が理解するのにゆうに数十秒かった。

（巫女が私に会いたい？）

彼女と会ったことがあるのは、実際には数回。

彼女は私のことなどほとんど記憶にも残っていないだろう。だけ

ど、会ったことは少なくとも、私は彼女のことをよく知っていた。

それも知りたくないほど知りすぎて、彼女を嫌いになるほどに

ぐつと握った拳の中で汗が滲む。

本当は会いたくない。

私と彼女が会って何になるというのだと、追いつきたい気持ちは十分にある。

だけど、ここで彼女から逃げたと思われるのも嫌なのだ。

弱い私と意固地な私が戦うためにたつぷり数分沈黙した後、私はルッティに巫女と会うことを了解する旨を伝えた。

どう見ても不自然に考え込んだ私にも、ルッティは怪訝な顔一つせずに対応してくれる。

心配されるのも嬉しいけれど、今はそんな風に放っておいてもらえるほうが助かったので、口には出さないけれど私は彼女に心の中だけでお礼を言った。

### 【巫女】とは何か？

その起源は神に子供を授けられた女性、要するに初代世界王の母親であるとされている。

後に聖母様と崇められるその女性の名はヴィルシエリア。

世界の王の母であると同時に、神を守る守護者で戦乙女の名を同時に冠する伝説の存在。

彼女亡き以後、神と世界王を何人からも守り、公私にわたって補佐する役目として、世界王が選定される度に、その対となるように

巫女が選ばれるようになる。

そして、巫女が生んだ子供が次の世界王となる。

巫女と呼び方は違えども、要するに巫女も世界王の妻と同義なのだ。

もつともその存在は<神を信仰する陣営>にとって世界王と同列の地位を有し、後宮ではなく巫女のための離宮があり、彼女はそこで暮らしている。

はつきり言おう、王妃なんて私だけじゃなくて、歴代の王妃その大半が皆名ばかりの存在だったに違いないのだ。

実際、世界王の本物の妻は巫女。その存在であることは、誰が見ても明らか事実としか言いようがない。

しかし、不思議な慣例というものがあり、世界王と巫女は二人の間に子供を作り、巫女が生んだ子供でなければ世界王になれないというのに、結婚はしない。

それはその始まりが母と子であったことに帰来するのか、その辺りの事情に明るくない私には計り知れない部分があるのだけれど、世界王に即位したと同時に新しい巫女も選ばれ、そして、結婚しないまま子供を作り、その子供が次の世界王として即位するまで二人は世界王と巫女として共にあり続ける。

世界王は基本的には王妃と後宮を持つものらしいが、巫女を想い、妻の一人も娶らなかった世界王も実際にはいるらしい。

要するに舞踏会でフィリーと踊るのだって、王妃わたしではなくて巫女がその役割を担うのが正しいといえば正しいのだ。

ちなみにもちろん私がこちらの嫁ぐより前に巫女はフィリーの隣に当たり前のよう存在していた。

そして、フィリーと私の結婚式にも参列し、彼女から祝福を受けた。

神々しい巫女の衣装を身に纏った彼女は、花嫁衣装を着た私より

もはるかに美しく、世の人は世界王の妻が巫女でないことを私に聞こえるように嘆いた。

彼女と最後にあつたのはその時だと思っただけけれど、それ以降、一度だって会いたいなどと言われたことはない。

( 一体、何の用なんだろう? )

私は巫女の所に行くために着替えるのをルツティに手伝ってもらいながら、悶々とそれについて考え続けるがやはり何も思い当たる節がない。

ちなみに会いたいと言ってきたのは向こうなのに、どうして私が赴かなくてはならないかとか、そういうツツコミは心の中でしまっておいてほしい。

こつという堅苦しい場所はともかく、地位や礼儀というものにつるさい。

世界王のただの妻という私の立場より、巫女という世界王に匹敵するただ一つの存在の彼女のほうが、ここでの立場はかなり上。

その彼女に私のところに来て頂くなど、はつきりいつて失礼千万、不敬罪で首が飛んでしまうくらいのことらしい。(ドレスだって失礼のないように着替える必要があるのだ)

そんなの会いたいほうが会いに来ればいいんじゃないと、私なんかは思ってしまうのだけれど、それで私の周りの人に迷惑がかかるには申し訳ないし、どうせ暇なのだから出向くのは億劫ではなかった。

しかし、着替えを手伝いながら、後宮から出るということにルツティが難色を示していた。

「今はまだアイルフィード様の警備が万全でない以上、後宮から出ることはやはりお勧めいたしません。」

着替えはすみ、今度は鏡台に座って髪を結びあげられる。  
ルツティはブラシとピンを使って、魔法のような手際でそれを完成させた。

「そうはいつでも、行くつて言ったものを今更行けないとは言えないし、巫女に来てもらう訳にもいかないでしょう?」

「そうなんです。大体、慣例はあるかもしれませんが、アイルフイーダ様のご事情を鑑みれば、巫女の方から来るべき所です。用があるのもあちらですし…一体、何の用なんでしょうね?」

「そんな事、私もわからないわよ。ともかくお待たせするのも申し訳ないし、さっさと行って帰ってきましょう。」

全体像を鏡で確認して準備は完了。

「しかし……」

私の侍女という立場で責任を持つ彼女としては悩ましいところなのだろうが、実際、私としてはそんなに自分に警備を裂く必要があるのか首を捻るところだ。

確かに<神を信仰しない陣営>の王妃というのは前代未聞だろうし、私が誹謗中傷されているのも事実なのだろう。

だけど、ここはあくまで城の中なのだし、しかもこんな白昼堂々と私を襲う輩がいるとは思えない。

幸い巫女の離宮は後宮とはさして離れていないというし、私としてはそのことに何の不都合さも感じないのだが、さて出陣だとばかりに立ち上がる私をルツティはなおも引き止める。

「お待ち下さい!いかれるにしても、ともかく一度陛下に許可を頂いてからでない?」

「城の中を移動するだけで陛下の許可があるの?」

こんな言い方をしたくないけれど、いい加減言いたくなる。

「申し訳ありません。ですが、アイルフィーダ様のことに関しては全て陛下のご意志を確認するように申し付けております。」

部屋から廊下に行く唯一のドアの前に立たれてそう言われては、私も折れる他ない。

「はあ……じゃあ、その旨を巫女側にも伝えておいてください。陛下にも早く許可をもらってください。」

待たせて後で難癖をつけられても面倒だ。

「はい！では、もう少々お待ちくだ。」

「し・失礼いたします！アイルフィーダ様、巫女よりお迎えの使者がいらつしやいました。」

ルツティがファイリーの許可をもらうべく部屋を出ようとした時、別の侍女が何だか慌てた様子でドアの外から声をかけてきた。

ノックもなくいきなり声をかけてくるなんて、教育が行き届いている後宮の侍女にはあるまじき行為だけれど、その言葉にルツティも驚いたらしく、それに気が付かぬままドアを開ける。

「迎えますって？」

「はい。あのえっと……アイルフィーダ様のご事情を察して、巫女の護衛騎士ランスロット様が離宮までご案内すると言ってお越しなのです！」

現れた侍女は私も見知っているいつもは落ち着いた感じの女性だ

が、彼女もどうしたらいいかわからずオロオロしている。

「どうやら命を狙われる危険がある（笑）私を慮って、巫女が私の移動に際して自前の騎士を護衛につけてくれるらしい。」

「至れり尽くせりで怖いくらいだ…だけど、そうまでして彼女は私に会いたいということでもある。」

「と、ともかく陛下の指示がなくてはアイルフィーダ様は動かさせません。騎士殿にも少しお待ちいただいて」  
「と言われても、もう来ちゃってるんだけど？」

その声に侍女たちのやりとりを見ていなかった私も驚いて振り返る。

侍女二人があんぐりと口を開けて驚いたその先に、一見して騎士だと分かる服装をした青年が一人。

見事な銀髪は長いまま垂れ流し、切れ長で聡明そうな瞳は深い青、派手な配色を有するその青年は、なるほどその派手さに見合う美しい造形をしている…が、

（騎士っていう割には軽薄そうな男ね）

いい大人が『来ちゃってる』なんて言葉を堂々と使うなど、私は男をじつとりと睨み付けた。

だが、男は睨み付けた私の顔を別の意味にとっちらしい。

「いやあ、そんなに見つめられると困ります。どんなに焦がれても、貴方は王の妃なのですから。」

などと妙に芝居がかった言葉でおちゃらける。

その言葉に怒りと呆れで米神と口元がひくつく。

かくして、この男、侍女が言った通り巫女付き騎士ランスロット

への最初の印象は最悪の一言に尽きた。

まるでお伽噺から飛び出た王子のように、ランスロットは優雅に一礼すると口上を述べた。

「お初にお目にかかります。私は巫女直属騎士ランスロット・ロバルデ。王妃様におかれましてはご機嫌麗しく。お目通り叶いまして恐悦至極に存じ奉ります。」

顔を上げるときらりと光る笑顔。

私はそれを見て、彼は職業を間違えたに違いないと心の中で断言する。

（これだけ顔がいいんだから、役者にでもなればよかったのに…いや、演技は下手だからそれも難しいのかな？）

言っていることは非常に礼儀正しいのだけれど、その言葉を告げる声や態度が薄っぺらく、私は自分自身がひどく軽く扱われている気がして、気分が悪くなるのを感じた。

別にこの派手な男に敬われたいとか、傳かれないとか、そういう事じゃない。

ただ、こういう薄っぺらい態度で接するのならば、それに相応した軽い言葉で話せばいいのだ。

妙に丁寧な言葉を軽い声で話されるから、馬鹿にされているような、見下されているような気がして、嫌な気分になる。

（そんでもって、この男は最悪なことに、それを無意識じゃなくて…私の機嫌を損ねるためにわざとやっている。）

挑発されているのだろうか、頭の片隅で考える。

この挑発がランスロット個人のものなのか、はたまた巫女から男を通してされているものなのか、相手の意図が分からないまま、こんな安い挑発にのるのも馬鹿馬鹿しい。

すつと私のどこかで温度が下がるのを感じた。

「こちらこそ初めまして。アイルフィードと申します。本日は巫女様のところまで護衛して頂けるとか、ご多忙の中お手間を取らせてしまい申し訳なく思っております。」

笑顔を浮かべ、スカートの裾を両手で持ち、僅かに腰を落とす。

その角度や、頭を下げるかどうかなど、自分と相手の地位を考えて変化させなくてはいけない、この一連の動作もファイリーンのスパルタ教育の賜物で完璧だ。

そんな上っ面だけ完璧な王妃の私を見て、ランスロットも更に笑みを深くする。

「これはご丁寧に。何、私は巫女付きなので、巫女が動かなければ大した仕事もない暇な身ですのでご安心くださいませ。それより王妃様こそ誕生祭が近い今お忙しいでしょうに、主の我儘におつきあい頂き申し訳ありません。」

表だけ取り繕って空言で謙虚に装い、互いの腹を探るかのような言葉のやりとりが、笑顔の間に火花となって散る。

その火花が見えた訳ではないだろうけど、そこでそれまで呆けていたルツティが我を取り戻し、弾かれたように叫んだ。

「ランスロット様！こちらは後宮、それも王妃様の自室ですよ?!」

いつも静かに話す彼女が真っ赤になって声を荒らげる様子に、隣

で一緒に呆けていた侍女も目を丸くする。

それに一瞬気まずそうな表情を浮かべた後、ルツティは冷静さを取り戻すかのように深呼吸を一つすると言葉を続けた。

「貴方様が誰であろうと、後宮に陛下以外の殿方が入ることは許されません。すぐにご退出下さいませ。」

「まあまあ、侍女殿。そんなかたいことを仰ら」

ランスロットは人好きしそうな笑顔を浮かべながら、ルツティの肩に手を置いて彼女を宥めにかかるようにする。しかし、

「汚らわしい！触らないでください。」

その手をルツティがピシヤリとはねつけ、手を落とされたランスロットも上つ面が剥けて目を見開く。

(『汚らわしい』なんて、中々強い言葉を使ったわね)

いくらランスロットが軽薄な若者そのものだとしても、いくらなんでも『汚らわしい』とまでは思わないし、それは思っただけでも口にするのは少々憚れる言葉だ。

そんなこと侍女の鏡のようなルツティが分からないはずはないのだが、ランスロットの突然の登場に混乱しているということなのだろうか？

常とは違う彼女の態度に、私も心の中で首を傾げた。

「巫女からの使者であるというのであれば、取次の間でお待ちください。これ以上、ここに居座ると仰るのであれば、後宮の護衛兵を呼んで貴方を排除するだけです。」

小柄なルツティがランスロットと私の間に立ちはだかり、毅然と  
言い放つ。

「それは困りますね。畏まりました。すぐに退散いたします。」

上つ面を取り戻したランスロットは、困ったと言いながら顔に笑  
顔を張り付けたまま両手を上げて降参のポーズをとる。

そして、一礼をして頭を下げたまま視線だけを私に向ける。

「それでは取次の間でお待ち申しております。お早いお越しを…巫  
女は王妃様と違ってお忙しいので、あまり時間がございません。」

丁寧な言葉を軽い声で紡ぎながら、最後のところだけ少し声のト  
ーンを落とし、私を見る目に剣呑な光が宿る。

その瞳の光はランスロットが、ただの顔だけの男だということを  
否定するだけの強さがあった。

(あら、そういう顔もできるわけね。)

その瞳が含むところに気が付かないふりをして、私はのんびりと  
そんなことを考える。

軽薄なだけな男の軽口に閉口し続けるのと、侮っては痛い目にあ  
うからと気を張り続けているのでは、どっちが楽なのだろう？

まあ、ランスロット相手に喧嘩をするわけじゃないのだから、そ  
んなことを考えなくてもいいのかと思いましたが、巫女に会う前か  
ら疲れてしまって、私は大きく息を吐いた。

ランスロットが告げた通り、巫女は分刻みのスケジュールを無理やり開けて私と会おうとしているらしい。

遅れる旨を伝えたら、それでは困ると巫女サイドから強く拒否されたのがその証拠だ。（向こうが会いたいと言っているのだから、その言い分には理不尽さを感じないでもないけれど）

それならばルツティも自分が同行するということを条件に、フィリーへの報告を後回しにして私の久々の後宮脱出はなされた。

かくして、私は巫女の離宮へと案内されている。

先導するのは無論、使者を買って出ているランスロット。

群青のマントを翻して颯爽と歩く様子はさすがにさまになっていると言わざるを得ず、通りすぎる城仕えの女性たちがうつとりとした目で彼を見送るのも当然なのだろう。

しかし、一方で男性からは憎々しげな視線が多く向けられ、その視線の強さから同性にはやはり好かれないタイプなんだろうなと想像がついた。

まあ、彼の後ろに私がいることに気が付くと、皆一斉に<神を信仰しない王妃>に対する嫌悪だったり、侮蔑を隠しもしないので、彼に対する城の人たちの反応は大体しか分からない。

「王妃様は結構度胸が据わっていらっしやるんですね。」

離宮への入り口は後宮と同じく、一つしかないらしい。

そこに辿り着くと、ランスロットは入口の前で立ち止まり急にそんなことを言い出した。

人通りが多かった後宮からここまでくる廊下とは違い、離宮へ続く入口である大きな扉の前は警備の兵が二人立っているだけ。

それも職務に忠実なのか、ランスロットに敬礼をした後は微動だにする様子もない。

「どういう意味ですか？」

「いいえ？ここまで来る間、どう見ても好意的とは言えない視線を送られたり、陰口を叩かれているのに気が付いていない訳じゃないでしょう？そこまで鈍感だったら、逆に尊敬しちゃいます。」

だんだん私に対する敬語は崩れ、攻撃性が増してくる。

「けど、やっぱり『しちやいます』はないだろうと閉口した。

「だから、てつきり俺に助けを求めるか、彼らを黙らせるように命令するかと思ったのに、貴方は彼らの前をオドオドもせず堂々と歩いた。中々立派でしたよ。」

「言っただけ私ばかりと手を叩きさえする男に、勿論怒りを感じた。だけど、」

（それだけ私がかここではなめられているってことよね）

そう思うと怒気が削がれ、逆に呆れる気持ちが強くなる。

侮られたり、卑下されることには慣れていたし、そう思っている人たちの鼻を明かすのは痛快で嫌いじゃない。

でも、私が鼻を明かしたいのはこの男ではないんだ。

「ランスロット様、アイルフィーダ様に失礼じゃないですか。」

ルッティが私に代わって怒ってくれるのも嬉しいけれど、今はそれではランスロットの挑発に乗る訳にはいかない。

「いいのよルツティ。この方が言っているのは間違っていないわ。……それで、助けを求めたら助けてくださいました？」

私の言葉にランスロットの顔が爽やかなまま、凶悪な色を纏うのを私は確認した。

この男は私がこういうのを待っていた。そして、次の言葉を言いたくて仕方がなかったんだ。

「名誉ある巫女直属騎士である私が、『たかが』王妃を守る義理はないでしょう？」

巫女の周辺にいる人にとって、王妃わたしという存在は邪魔で仕方がないのだろう。

それもく神を信仰しない陣営の王妃だ。

だからこそ、巫女の権威を振りかざし、私を貶めたくて仕方がない。そうしないと我慢ならない……そういうことなんだろう。

(なんて性格が悪い男)

だけど、この男がどう思っているようが、何を言おうが関係ない。

(要はこの男の言葉が、巫女の言葉かどうかっていう事)

ランスロットが個人的に私を嫌っているのならば、大した問題でもない。

ここに来るまでに私を睨みつけたり陰口を言った人たちと、それは同じ。

だけど、巫女までもが同じとなれば話は別だ。

「それもそうですね。それより、巫女はお忙しいのでしょうか？お待

たせしては申し訳ありませんわ。」

何しろ彼女は私の夫の、たった一人の想い人。

私にとっては恋のライバル…まあ、最初っから負けは確定なのだけれど。

だけど、彼女にだけは自分の弱みを見せるわけにはいかないのだ。

彼にとっては最大限の攻撃にも動揺する様子のない私に、たじろぐランスロットを尻目にさっさと歩き、扉の前で開門を要請する。

「王妃アイルフィーダ。巫女のお召しにより参上しました。お取次ぎをお願いいたします。」

視線は下げない。背筋は曲げない。

ファイリーンとの講義で、威厳を保つために重要なことは姿勢と心持だと彼女は断言していた。

そんな精神論なの？と苦笑したものだけど、こうして実際に威厳というものが必要な場面に直面してそれが正しいことがよく分かった。

(巫女と対面する少しの間だけ…頑張れ私)

小さく心の中でそうつぶやいて、重い音を立てて開く扉を私はくぐった。

私の身長の三倍はある大きな扉が開いた瞬間、光が溢れた。

眩しいと細めた瞳で扉の向こうの景色を認識して、ここが自分が今までいた城の中と同じ場所とは思えなかった。

広がるのは植物の緑と、空の青の美しいコントラスト。私が今立っているのは、さながら空中庭園。

城の高い位置に建てられている離宮は、その大半が美しい庭園で、遮るものない空はただ只管に青く果てしない。

沢山の側室たちの部屋を一堂に集めるべく存在する後宮は、広い敷地でも部屋の数が多く、ぎゅっと詰めこまれたような閉塞感を覚えるが、さすが巫女一人のために用意された離宮は大した広さはなくても後宮にはない解放感があった。

庭園を道なりに歩けば、見たことも無い色取り取りの花々、鳥や蝶、せせらぎを奏でる小川まである。

それを横目にたどり着いた先には、こじんまりとしているが贅を尽くされたと分かる美しい離宮が鎮座している。

多分、何とか様式みたいな伝統ある造り方で建てられているのだろうが、生憎そうだったことに疎い私には綺麗な建物だなぁぐらいの感想しか抱けない。

「王妃アイルフィーダ様をお連れいたしました。」

離宮の前でランスロットが高々にそう告げると、離宮の扉が開き、そこから続く廊下に十数人ほどの侍女がずらりと並んで頭を垂れ、私たちを出迎える。

頭を下げる角度は直角で、彼女らの表情は私からは全く窺い知る

ことはできないが、なるほどここまで来る間に会った城仕えの人たちよりは『教育が行き届いている』訳だ。

（本心はどうだか分からないけど？）

そんな意地の悪いことを心の内で考えながら、嫁いできて私も疑り深くなったものだと思いで自分が悲しくなる。

故郷を離れ、誰一人味方がいないとわかっていて嫁いだつもりだったけれど、想像と現実やはり違うものだと思感させられたこの数か月。

誰も頼ることができない孤独感、明らかに異分子と認識せざるを得ない環境、隠されることのない嫌悪と侮蔑。

それに対する自分の感情の動きが、嫁いだ当初とは明らかに違っていると気が付いた。

少し前は自分が変われば周囲も変わるのではないかと色々試してみたりもしたけれど、やはり<神>という存在を隔てた私と彼らの溝は、私の努力程度では埋まるものではないのだと実感させられた。結果として私は少し変わった。

人を始めから疑っていけば、何か言われても傷は浅い。

自分のことを他人事のように考えておけば、自分の傷と向き合わずに済む。

多分、無意識下で私はそういう風に感じて、それを実行している。人間というのは気が付かぬうちに、こんな風に自分の心を守るように防衛手段をとっているのだと、自分のことながら感心してしまう。

（まあ、そういう自覚があるうちは、まだ大丈夫よね。さて…今日のメイスイベントよ）

前を先導していたランスロットが膝をつき、斜め後ろを歩いていったルツティが大きく頭を下げる。

私もファイリーンに教えられた最大級の礼をとって、頭を僅かに下げ、スカート裾を持ち、腰を少し折って、彼女から話しかけられるのを待つ。だけど、膝はつかない。

「頭を上げて、アイルフィーダ。」

高くもなければ低くもない、聞き心地のいい声が私の名を呼ぶ。

「急に呼んだりして、ごめんなさい。でも、どうしても貴方に話しておきたいことがあって。」

巫女様と崇め奉られていようと、昔から飾り気のない気さくな彼女の気性は変わらないらしい。

自分が悪いと思ったことはきちんと謝る様子に、ランスロットのような嘘は感じられない。

「だけど、だからこそ彼女という存在は厄介なのだ。そう思いながら、私は頭を上げ彼女の顔を見て笑って、考えてきた挨拶の言葉を述べる。」

「こちらこそ、ずっとご挨拶もしないまま本日に至りまして申し訳ありませんでした。リリナカナイ様。」

巫女リリナカナイ・デュヒエ

彼女という人物を的確に表すと、清く正しく美しい完全無欠の聖女様。

言っていて非常に嘘っぽい言葉に聞こえるかもしれないけれど、

彼女は実際に容姿端麗、頭脳明晰、運動神経抜群と、本当に非の打ち所がない。

更に言えばこれだけ色々な天賦の才的なものがあれば、それを鼻にかけて性格の一つや二つ悪くなりそうだけれど、彼女に至ってはそれもない。

「様付で呼んだりしないで！昔みたいにリリナって呼んで？」

大人の女性のように強く正義感に溢れ、明るく優しく、それでいて子供のように無邪気で天真爛漫。

せめて、物語の恋のライバルのように鼻持ちならない高飛車なお嬢様（例えばファイリン）みたいだったら、彼女を憎むことは簡単だった。

「ですが……」

「確かに私と貴方は、ファイリーの巫女と王妃っていう関係になってしまったけど、それは政略上仕方のないことだもの。むしろ、貴方を巻き込んで私もファイリーもとても心を痛めているのよ？だから、ね？私とファイリーだけは貴方の味方だから、そんな他人行儀にならないで！！」

せめて、彼女が私を傷つけようとしているのなら、反撃することは簡単だ。

だけど、彼女は昔に少しだけ付き合いがあっただけの私を守ろうと、助けようとしてくれるから、私は何もできない。

（だって、これで私が嫌味の一つでも返そうものなら、私が悪役じゃない？）

いや、実際にはそうなんだろうなと思う。

これが巷に溢れる夢物語なら、主人公は何もできない根暗王妃じゃなくて、綺麗で優しい巫女様だ。

背後で巫女に使える人たちもそう思っているに違いない。

振り返らなくてもビシバシと感じる、警戒するように私たちのやり取りを見つめる視線がそれを物語っている。

それに気づかず私を気遣うリリナカナイにヤキモキしつつ、彼らはそんな彼女に心酔し、私を悪役に仕立てたくてたまらない。

だけど、それも無理のないことなのだと言いつつ、

悪役になるのは簡単だったけど、私だってこんな風は無条件で私を心配してくれる彼女を昔から苦手とは思っていても、心底嫌いはなれない。

だから、苦しくても笑う。

「うん。リリナ、分かったわ。」

「良かった！私も昔みたいにアイルって呼んでいいよね！」

そう言って輝かんばかりの笑顔を見せる彼女に、Noといえる人間がいたら是非お目にかかりたい。

リリナカナイのことを心底嫌いになれないと思う。だけど、やっぱり嫌い。

でも、それは彼女自身が嫌いというわけじゃない。

私にはない全てを持っている彼女、フリーに本当に愛されている彼女、そんな彼女を妬ましいと思う卑屈な自分が嫌い。

だって、それは戦わずして負けていることと同じ。

何だかんだで結構負けず嫌いな私は、彼女から逃げたくないと、こうして性懲りもなく彼女に立ち向かったりするのだけれど、やっぱり一度だって彼女に勝てた試しはない。

時間がないという割には、リリナカナイは優雅に私を午後のお茶に誘った。

離宮の一室、多分こうして来客などがあるときに使う場所は、明るい日差しが差し込んで、とても気持ちいい。

そこで私は同じテーブルで、お茶とお菓子をリリナカナイと囲んでいる。

私の背後にはルツティが、彼女の後ろには年配の侍女と反対にとっても若い侍女の二人が並んでいる。

侍女二人、特に年配の侍女はにこやかに給仕してくれたが、その目がリリナカナイを傷つけたら許さないと如実に語っていて、少々笑えた。

昔から彼女は老若男女問わず好かれていた。

「それにしてもこの前見た時にも思ったんだけど、随分髪が伸びたのね。昔、最後に会った時と全然印象が違ってびっくりしたわ。」

話があると言ったきり何も切り出してこないリリナカナイに、私はとりあえず無難な世間話を持ち掛けた。

今は長い髪だけど、昔の彼女はショートカットだったはずだ。

私と彼女は昔に何度か面識はあっても、深い関わりがあったわけじゃないので、共通の話題が大してないけれど、この話題にリリナカナイも笑った。

「うん。この髪と目は巫女の証みたいなものだから、周りが五月蠅いの。」

そう言つて、彼女は陽の光にキラキラと光る銀の糸のように艶のある髪を摘まんだ。長さは彼女の腰ほどはある。ちなみに瞳の色は薔薇のような赤。

一般的には髪も目も黒や茶が大多数な世界分布率から言つて、この組み合わせは非常に珍しい。

そして、それは巫女に選ばれるための必須条件でもある。

「だけど、本当は私の髪、すごい癖があるから伸ばすと面倒なの。

寝癖もすごいし。侍女の皆がものすごい気合い入れて手入れしてくれているから何とか見れるけど、私一人だったら大爆発してる。」

「そうなの？」

私も髪は比較的長いほうだけど、そんな悩みは持ったことはない。(嫁ぐ前は基本的にいつも一つに結んでいただけだった)

「私、結構面倒くさがりなの。基本的にお洒落とかにもあまり興味ないし。髪を伸ばし始めて結構経つけど、やっぱり昔みたいなのシヨ

「トカットが一番楽だったと今でも思う。」

「まあ！何を仰いますか！リリナカナイ様がお持ちのような美しい髪を伸ばさないだなんて、もったいないですわ！」

「え〜？でも、やっぱり色々面倒だもん。」

年配の侍女が窘めるように言った言葉に、頬を膨らませるリリナカナイ。

私より四つ年下だった彼女も立派に成人したはずだけど、美形というのは大人になってもこんな表情が様になるから恐ろしい。

そこから話はしばらくリリナカナイの意外な一面とでも言おうか、愛らしく可憐な容貌とは裏腹によく言えば活動的、悪く言えばじゃじゃ馬だという事実に終始した。

「でも、ファイリーが髪が長いほうが好きだっていうから…長くてもいいかな？つて…ふふ、なんか恥ずかしい！」

「ええ、よく似合っているもの。」

なのに惚気に行き着いた話の結末を苦々しく思いながら、顔を赤らめてはにかむリリナカナイに笑顔でいれる自分に拍手を送りたい。それにしても、ファイリーが髪が長いほうが好みだとは意外だ。

昔はショートカットの女の子の頂が大好きだとか、私にさんざん持論を展開していたというのに、好みが大人になって変わったのだろうか？

「どうかした？」

ふと、そんなどうでもいいことに気を取られて黙り込んだ私を、リリナカナイがテーブルを乗り出して覗き込む。

間近まで迫った珍しい赤い瞳にぎよっとする。

実はいろいろと思い出すことがあって、私はこの赤い瞳が好きじ

やない。

「なんでもないわ。それより、今日は時間がないって聞いたわよ？話があるって言うていたけど、何だった？」

「あっ！うん…あのね？」

本題に話を進めた途端に妙に歯切れの悪くなるリリナカナイ。

その表情に僅かに暗い影が落ちることが気になった。

「何か言いづらいことなの？」

とはいえ、彼女と私の共通点はフィリーしかない。多分、その関係の話だとは思っただけど、私には全く彼女が何を話したいか見当がつかない。

かくして、僅かに逡巡した後、彼女はドンと机に手をつけて私に言い放った。

「ごめんなさい！！！」

「……へ？」

いきなり謝られて訳が分からない。

背後の侍女たちも、何が始まったのかと驚いた表情を浮かべている。

「明後日のフィリーの誕生祭なんだけど…その夜には舞踏会があるの。そこでは本当は王と王妃、フィリーとアイルが躍るはずだったのに、頭の固いお爺さん達が」

「私じゃなくてリリナに躍るようにお願いしたんでしょ？」

何か酷く申し訳なさそうに謝る彼女に、それ以上言わせたくなく

て私が彼女の言葉を変わった。

それをどうして知っているの？と言わんばかりに目を大きく開けて、リリナカナイが私を凝視した。

「知っている。陛下からこの前言われていたから。」

それを聞いて大きな目を更に見開いた後、彼女は大きく息を吐くしゃべり方や仕草など色々と幼い印象を受けるリリナカナイだけれど、こうして大人びた表情を見ると彼女もこの数年の間に大人になったのだと実感させられた。

「そう。私から話すっていったんだけど、フィリーは自分が悪者になつてくれたんだね。」

「リリナ？」

「私とフィリーは、本当はアイルに舞踏会に出てもらつつもりだった。ううん、明後日の誕生日祭はアイルを王妃としてきちんと周知させる絶好の機会だもん。私たち二人で貴方をく神を信仰しない陣営>の世界王妃としてきちんと認めさせる予定だった。」

言いながら頭をぐしゃぐしゃとかき混ぜ、綺麗にセットされた髪をぼさぼさにする。

「なのに！頭の固いお爺さん達が！私達の予定を悉く潰したの…ごめんなさい。私もフィリーもこっちに来てもう七年も経つのにまだあの人たちに対抗できないでいるの。」

「いやっ、そんな謝ってもらつことじゃ…？」

しゅんと萎れた花のように項垂れるリリナカナイに私が慌ている。背後の侍女たちの視線は怖いし、何より彼女の告げた事実混乱する。

「えっと、要するに本当は私が舞踏会にも出る予定だったけど、それを重臣の方々が反対したってことでいいのかしら？」

「重臣じゃなくて、あんなの頑固爺どもでいいのよ！！」

子供のように反論された言葉はとりあえず無視して、そこではてと思い至る。

「だけど、陛下はそんなこと一言も仰らなかつたけど。去年まで貴方が出ていたから、今年もそれで行くみたいない方だったわ。」

「フィリーの悪い癖ね。自分が悪者になっても、貴方に余計な心配をかけないようにしたんだと思う。アイツってば昔からそうなのよ、自分よりもいつも他人ばかりを心配する。」

そう言って仕方がないなというように苦笑する彼女の表情は慈愛に溢れ、二人の二人にしか分からない絆を見せつけられる。

少なくとも私は彼のことをこんな風には言えない。

「でも、私はね、アイルに全部話したほうがいいって言ったの。重臣がアイルを王妃として認めたくないと思っていたり、色々な人が貴方を傷つけようとしているって知っていたほうが良いと思っただら。どんなに私たちが庇っても庇いきれない部分はある。それだったら、アイルにも全部了解の上で一緒に頑張りたいと思ったから。」

それはそうだろうなと思う。

後宮に閉じ込められていようとも、やっぱり周囲の私に対する偏見や風当たりは感じざるを得ない。

「だから、私から話すって言ったのよ。フィリーが言ったのではア

イルだつて顔かないわけにはいかないでしょ？私から事情を聞いたからイルは嫌な気持ちになるかもしれない。だけど、イルが嫌だと感じたら、私相手だつたら怒つたり断つたりしやすいでしょ？」

リリナカナイは私が反発するかもしれないと分かつた上で、この話を自分から言おうと決めていたらしい。

潔癖で優しい彼女らしいと思つたけれど、私は自分の気持ちが塞ぎ込んでいくのを感じた。

（フィリーから言われようが、リリナカナイから言われようが、私に否だといえると思つているの？…思つているのよね、彼女は『何も知らない』んだから）

心の中でそう呟いて、私は膝の上に置いた拳を握りしめた。

「でも、怒られたつて、断られたつて…私は最終的に私とイル、二人でフィリーを支えていきたいと思つている。」

「え？」

思わぬ言葉に私は声を漏らす。

「<神を信仰しない陣営>を離れる時、話したよね？フィリーと私は、二つの陣営をいつか手を取り合つていける存在にしたい。その一つの手段として、<神を信仰する陣営>を中から変えるために私たちは世界王と巫女になった。」

二人は歩み寄ることない両陣営を、強いては世界を一つにするために自ら苦行を選んだ。

その決断を知っている私は、彼女の言葉に頷く。

「でもね、それは私たちが思っている以上に大変で、もうあれから七年も経ったのに私たちは重臣の意見一つ変えられない。自分の無力を実感するばかりの数年だった。今のアイルみたいに風当たりも強かったしね。でも、やっとここまで来た。」

まっすぐに赤い瞳に射抜かれて、私はどきりとした。

彼女の穢れのない瞳は何もかもを見透かしてしまいそうで、見つめ返すのが怖いくらいだった。

「私やフィリーは<神を信仰しない陣営>の人間じゃない事になっているから、私達を通して<神を信仰しない陣営>を理解してもらうには限界がある。それを公表するのは現状では難しいしね。でもとりあえず<神を信仰しない陣営>の人間だつて人間だと思つてもらうところから始めなくちゃいけない以上、実物を用意する必要があつたの。」

「それが<神を信仰しない陣営>の王妃ということか。だけど、私一人が来たところで何が変わるつていうの?」

「分かつてる。だからこそ、私もフィリーもアイルを大々的に発表して、これから色々な公式行事にも参加してもらつつもりだったの…なのに」

まあ、世の中そう上手くはいかないものだろう。

フィリーからは全く聞いていなかった、彼らの事情というものを目の当たりにして私もなるほどと納得する部分が大きい。

<神を信仰しない陣営>から押し付けられた私に対して、妙に厚遇されている（警備が厳重だったり、侍女の質が良かったり）と思つてはいたけど、それにはそれなりの彼らの思惑があつたというわけだ。

「でも、今後はアイルにも表舞台に立つてもらいたいの。……辛い

かもしれないけど、二人で守るから！お願いよ、私とフリーに協力して？一緒にく神を信仰する陣営を変えていきましょう？」

そう言っつて私の手を握りしめると彼女は懇願する。

普通の人間なら、その言葉に、心根に、信念に感銘を受けて、心から頷く場面なのかもしれない。

(どうして、私にそんなこと言えるの？)

心がそう叫びをあげて、強く苛立ちを感じた。

分かっている。彼女は『何も知らない』。

知っていたら、私にそんな事をいえる娘じゃないことは分かっている。だけど、それが何だというの？

知っているからこそフリーは私に何も告げなかったというのに、彼女はそれを察しないの？

「わ・私は…私は」

声が震えた。

怒りとも悲しみとも分からぬ、だけど大きな感情の揺れが私の中で震えていた。

「アイル？」

それを不思議に思ったんだろう、私が賛成することを微塵も疑っていないリリナカナイが小首を傾げて私を覗き込む。

「私はっ！！！！」

## 2 - 6 (後書き)

過去編で詳しくは後々分かってきますが、フィリーとリリナカナイもく神を信仰しない陣営で育っています。

その彼らがどうして世界王と巫女になったかとか、アイルフィーダがどうしてリリナカナイに怒りを感じたり、リリナカナイが何を知らないのかなども、やっぱり過去編が全てのカギになってきます。

「私は」

この時、本当は何を言いたかったのだろうか？  
理不尽な周りへの鬱憤？

リリナカナイへの感情？

何もかも自由にならない事への嘆き？

愛されない自分への絶望？

「何をやっている？」

自分で自分の感情を制御できない混乱する頭に、静かな声が響く。  
確かに喉元まで出かかった強い感情は、その声の正体に驚いて再び飲み込まれた。

「へ」

「ファイリー！！どうしたの！？」

扉の所に佇むその姿を見て、弾かれたようにリリナカナイが席を立ち駆け寄る。

その顔は満面の笑みに彩られ、声は喜色に満ちていた。

突然の王の登場に侍女たちも俄かに色めき立ち、私以外の全てが彼を中心に回りだす。

「リリナ…いや、もうすぐ会議があるだろう？迎えに来たんだ。」

駆け寄った勢いそのまま抱きつく彼女を優しく見下ろしながら、そう告げるファイリーの表情は、過去に彼女を見つめていた彼と寸分変

わりなく、優しく愛に溢れている。

『愛している』なんて言葉にしなくても、伝わってくる二人の絆に私は自分の中で一瞬だけ爆発しそうになっていった感情が、冷え切ったいくのを感じた。

(私…何を言おうとしていたんだろう？何を言ったところで何一つ変わる訳でもないのに)

二人が想いあっていることは八年前から知っていた。

だからこそ、全てを諦めていたはずなのに、それでも私の中にフリーを思う気持ちがある限り、二人が一緒にいるところをみて平気でいられるはずもない。

「それより、どうして彼女がここにいるんだ？」

言葉とともにフリーが私を見る。

その言葉と視線に宿る強さが、暗に私がここにいることを責めている。

「それ」

「私が呼んだの。」

フリーへの問いに答えようとした私の声を、リリナカナイの音が掻き消す。

「フリーはアイルに何も言うなっていうけど、やっぱり協力をお願いする以上、彼女を除け者にはできないよ。大丈夫、彼女は私の言っていることを理解してくれた。」

私はここにいるのに、まるで私がいなかったかのように二人の間で話

が展開する。

大体、私はまだ彼女の要請に承諾の意を示した覚えはない。

だけど、長い彼女の話の中で、否定の言葉一つ言わなかった私は、リリナカナイの中では既に協力者らしい。

（ううん。そもそも貴方は私が断るなんて微塵も考えていなかったんだろう。）

私に『断られても、怒られても』いいから自分の言葉で協力を求めたかったと、彼女は言った。

だけど、今の様子を見て分かった。

そうはいつても、彼女は実際に私の拒否する様子など何一つ想像してない。いや、想像できないといったほうが正しいのかもしれない。

彼女のような特殊で選ばれた人間というのは、きっと他人に強く拒絶されたことなんかない。

だって、彼女はいつだって全てが正しから、誰一人彼女を拒絶することがない。

（それに拒絶したところで悪者になるのは私……ただでさえ居心地の悪い場所を更に自分から悪くしようなんて馬鹿としか言いようがないわね）

そう思って、『そうだよ？』と言って笑うリリナカナイに薄く笑った。

自分の意見すら言えず、答えようと声を発しても全て遮られる。

何だか自分という存在が酷く不必要な気がして、声を出すことすら億劫で、数歩歩けばすぐそこにいる二人が私には果てしなく遠く感じられた。

「何処まで話したんだ？」

「まだ、全然。明後日の誕生祭の事くらいかな？ねえ、会議までまだ一時間くらいあるわよね？これから三人で今後の事話し合いますよ！アイルをどうやって国民に好意的な王妃として見られるようにするかとか考えなくちゃ！」

「妙案だと言わんばかりに声を上げる彼女には、顔を歪めるフィリ―が見えていないんだろう。」

「リリナカナイ。君がどう言おうと、やっぱり俺は彼女をこれ以上巻き込むことは反対だ。」

「え？だけど、私達話し合って決めたじゃない。＜神を信仰しない陣営＞の王妃を大体的に打ち出して、国民の感情を変えていこうって…そのために恥を忍んで捨てた故郷に頭を下げたんじゃない！折角、情勢が味方してそれが可能になったのに。」

二人の声をこれ以上聞いていたくない。

二人の姿なんて視界にも入れたくない。

冷えていく心と連動するように、指先が冷たくなって、震えていることに気が付く。

それでも顔だけ笑っている自分が滑稽すぎて泣きたくなった。

「だが、まだその準備は整っていない。事を急ぎすぎて、彼女に危険があつたらどうする？」

「それを守るのが私たちの役目じゃない！！」

「勿論そうだ。だけど、俺たちもずっと彼女の近くにいるわけじゃない。彼女はお前や俺とは違って普通の女性なんだ。彼女を守るにはもっともっと強い盾が必要となる。それを作るには時間がかかる。」

まるで大人が子供に言い聞かせるように優しい声で、貴方は私を自分とは違うと切り離れた。

リリナカナイは同じで、私は違う。

（貴方と夫婦になった私より、やっぱり彼女が貴方にとって一番近しい人なのね）

「でも、巻き込みたくないっていても、アイルはもう貴方の王妃なのよ?! そうである以上、表に立たなくたって全く巻き込まないことなんてあり得ない!」

「だが、必要以上に表に立たせる意味もない。現状はお前と俺がいれば、今まで通り何でも上手くいくさ。そうだろう?」

リリナカナイの華奢な肩を抱いて、まるで愛を囁くように言葉を紡ぐフィリーを私は呆然と見た。

（ああ、貴方が愛を囁くときはそんな顔、そんな声なの）

毎晩、私に告げる固い声じゃない。顔はいつも抱きしめられて見れないけれど、きつと顔だつてそんなにとろける様な表情じゃないんだろう。

一緒にずっと戦ってきたパートナーと、自分に関わることも関わらせることも嫌な昔の知人程度の女じゃ、比べるまでもない。

（妻の前で他の女といちゃつく夫に、追いつがって『行かないで』という資格すら私は持っていないのね）

「フィリー……」

彼の言葉にリリナカナイが顔を赤くする。

そんな風にまるで周囲を忘れたかのように、熱い視線で見つめあう二人をどうにかして欲しいのは、どうやら私だけじゃないらしい。

「ウオツホン」

未だに立つたまま扉の入り口でやり取りを続けていたため見えなかったが、フィリーは誰かを連れていたようだ。

扉の影になって見えない場所から、野太い咳ばらいが聞こえて、リリナカナイは赤い顔を更に真っ赤にして、フィリーから離れる。私も金縛りにかかったように固まっていた体が、急に自由になったような気がした。

「レグナ！ビツクリさせないでよ！！」

「何言ってるんだ、この巫女さんは？俺はずーっとここにいたんだぜ？あんたがフィリーしか見えてなかったただけだろうが。」

リリナカナイがフィリーから離れると、のっそりと重そうな体を気怠そうに一人の男が部屋に入ってくる。

（大きい…）

男。  
小綺麗な部屋に非常にミスマッチとしか言えない、大きく強面の

決して長身とは言えないが、平均的な男性の身長はあるフィリーより頭一つ分大きく、服の上からでも分かる筋肉質な体はまるで熊。小柄なりりナカナイが喚いても、まるで気にした様子もない。

「大体、あんたは何しに来たのよ！？フィリーみたいに私を迎えに来てくれたわけ?!」

「ほんとにキャンキャンと子犬みてーに五月蠅いなあ。お前みたい

な色気のない小娘に俺様、  
用はないの。」

「なんですって!?!」

どうやら彼らは犬猿の仲らしい、ああいえばこついうといった感じでポンポンと言葉が行きかう。

リリナカナイの子供っぽい物言いも何だが、大男の方も彼女を挑発する気満々で言葉を選んでいるのは一目瞭然で、仲が良いのか悪いのか定かではないが、私はそれをオロオロと見ているしかない。

(…はあ、もう私に用がないのなら帰ってもいいかしら?)

この後、何やら会議もあるようだし。私をどうやって利用するかどうかは、もう勝手に話し合ってくれればいい。

ここに座っているのも自分の気持ち的に限界に近づいてきている。これ以上、ここにいて更に傷つけられるような言葉も聞きたくない。

リリナカナイに断ってこの場を辞しようと、心の中で決意すると、とりあえずルツティにそれを伝えようと後ろを振り向こうとした。

「俺が用があるのは、お前みたいなチンシャクじゃなくて、もっと大人なレディだ!」

だけれど、その声と共に腕をぐいっとなつかまれて、私は椅子から無理やり立たされた。

無様に転びはしなかったが、無理な態勢で引っ張られたため大きくよろけた私を力強い腕ががっちり掴む。

「レグナ!」

「わーってる。わーってる。」

何が起こったか目を白黒させる私を、決して美形とは言い難い顔が覗き込む。

強面の顔の割に、小さくとも円らかな瞳が興味深そうに私を見ている。

「大丈夫か？」

「はっはい。」

肩を支えられ、高い位置から覗き込まれた顔は近く、私は思わずのけ反りながら答える。

「ふざけるのはやめろ、レグナ。」

はっとして周囲を見ると、驚く一同の中でフィリーだけが怒ったような顔をしてこちらを見ている。

「別にいい？俺はふざけてなんていないぜ？俺は後宮から消えた王妃様を探して連れ戻すために来たんだし？」

「え！？」

彼はフィリーに向かってそう言ったけど、その言葉の内容に私が素っ頓狂な声を上げた。

「うん？」

「あの、一応、後宮を出る旨は後宮の護衛をしてきている人に報告してもらっているはずなんですけど？」

なのに『消えた王妃を連れ戻す』なんて言われるのは心外で、そうお伺いを立てると私を間近で見下ろしていた顔の目と口が意地悪

い感じで弧を描いた。

「おう、報告はもらったぜ？だが、その報告の後色々あって……なあ？」

レグナは私に答えているはずなのに、何故だか視線はフィリーに向けた。

「????？」

「まあ、ともかく今日は後宮に戻ってもらっぜ？そのためにわざわざ騎士団長の俺様が迎えに来たんだからな。いいよな、フィリーも巫女さんも？」

疑問形で投げかけているはずなのに、大男にして騎士団長らしいレグナは私の肩を抱いたまま動き出す。

その言葉にいくらか怖い顔をしたままのフィリーが黙って頷くのが、視界の端に見えた。

「え、ちょっと待つてよ!!!!」

だけど、リリナカナイはまだ言いたいことがあるらしく、レグナに背中を押されているため振り返っても姿は見えなかったけれど、彼女の声が聞こえる。

「リリナ、もうやめろ。」

そのあとにすぐフィリーの静止の声がかかる。

「だけど、まだ話が……!!」

「そのことで俺からも話がある。いってお」

その後も二人の会話は続いたようだけれど、部屋から連れ出され扉が閉まってしまうと、その声はもう届かなくなる。そうして私はやっと息がつくことができた。

「アイルフィーダ様、大丈夫ですか？」

私たちの後を追ってきたルツティが、どうやら見るからに疲れているらしい私に声をかけてくる。

それに声返す元気もなくて、少しだけ笑って答える。

ルツティは更に顔を心配そうに歪めた。

だけど、この時の私は彼女を思いやって元気に見せる気力すらもなかった。

(そういえば、昔もリリナカナイと会った後はこんな風に心が疲れすぎて声も出なかった)

あの時は姉エリーを酷く心配させたと、離れてしまった姉のことが急に懐かしくて切なく思い出された。

## 2・7（後書き）

これにて第二章は終了です。次章はまた過去編になります。

色々登場人物も増えてきて、互いの思惑や人間関係が現在と過去で交錯しながら物語が展開しているので、今はまだ分かりにくい部分があるかもしれませんが、きっと後々なるほど！と思ってもらえるような展開になるように頑張りますので、どうみても長い話になりつつありますがお付き合い頂けると嬉しいです。

とはいいつつも、来週はちょっと実生活が忙しいので更新はあまりできないと思われます。一応第二章は終わったものの、話的にはあまりきりがいいとは言い難いところで申し訳ありませんが、あまり次をお待たせすることがないよう頑張りたいと思っていますので、見捨てずにお待ちいただけると嬉しいです。

恋だと気が付く前に砕け散った感情は、歪な形となって永遠に消えない傷になった

貴方を思う気持ちを恋なんて言わない。

それはきつと恋よりも深く、重く、醜い感情。

【八年前】

私は今恋をしている

そう自分で心の中で呟いて恥ずかしさのあまり悶絶し、手に持っていたTシャツに顔を埋めた。

「一人で何をやっている？」

てつきり一人だと思っていたのに誰かの声が聞こえて、飛び上るほど驚いた。

「エリー！いきなり吃驚するじゃない！」

振り向けば、同い年の姉エリーが間近に立っている。

床に座り込んでいた私を見下ろす彼女は、いかにも私を馬鹿にし

たようにため息をついた。

「『吃驚するじゃない』はこっちのセリフだ。何回も部屋をノックしても気が付かない。部屋の鍵はあいている。こんなに近くに来ても気が付かない……いつものアイルだったら考えられない。」  
「え、嘘？」

私が今いるのは寮の自室。

各自に一人部屋が与えられているけど、中は狭くベッドと筆筒と勉強用の机と椅子を入れたら、後は何も入らない。

その部屋で私は筆筒の中の洋服を全てひっくり返すくらいの勢いで並べて、ああでもないこうでもないと言っていた所だった。

自室ということもあり油断していたところもあるだろうけど、ノックされて更に部屋に入ってこられても人の気配に気が付かないなんて、エリーの言う通りいつもの私だったら考えられない醜態だ。でも、

「まあ、いつもの私じゃないってことが。」

「?どういう意味だ？」

エリーは眉を顰め、そんな彼女を見てにんまり笑う私に、眉間の皺を更に深めた。

「私ね、恋をしていると思うの。」

そして、自分でも阿呆なことを言っているなと思いつつも告げた言葉に、エリーがあまり見せない間抜け顔を披露する。

「……………はあ？」

きりりとした美少年真つ青の凜々しい姉の顔が、笑ってしまったり呆けたものになった。

それに笑いながら、私は繰り返す。

「恋をしているって言ったのよ。だから、色々注意力も散漫なんだからと思う。それについてはごめん。謝るけど…それよりも何着て行ったらいいと思う？」

謝意のない謝り方をして、それでも全く話についていけないエリーに広げていた洋服の一つをあせながら見せる。

明日は『ローズハウス』への奉仕活動の日。

奉仕活動を始めて春が過ぎ、今は夏も終わる頃。

マリア教師からは奉仕活動は終わっていいと言われていたが、授業があるときは毎休みに、夏休みに入ってから怪しまれない程度に頻繁に通っている。

それは理由として『ローズハウス』で色々勉強になると思うことも多く（実際、最近では将来老人や子供の世話ができる仕事に興味がある）、それも大きな一因ではあるのだけれど、そこに大きな不純な動機もある。

『ローズハウス』で私は恋をした。

それも青春真っ只中って感じの、自分でも妙に照れるほどの淡い片思い。

「こ・こい」って、まさか恋愛の『恋』か!？」

「そうだけど？」

やっと、私の言葉の意味を正確に理解したらしいけど、まだ受け入れられないのか問いかけてくるエリーに顔はむけず、私は答えた。

「冗談だろう!？」

「冗談でこんなこという訳ないでしょ？」

その言いくさには少しむっとした。

怒った顔をしてエリーを見ると、彼女も自分の失言に気が付いたらしく顔を顰める。だけど、言い訳を続けた。

「だって、アイルは昔言ってたじゃないか！！周りにどんないい男がいようと、自分は恋愛感情を持ってないって。」

「ああ、そういえばそんなこと言ってたね。」  
「だろっ?。」

よくそんな事を覚えているなと思いつつ、確かに言ったことなので頷いて見せる。

「だけど、それは『あの中』でっていう話だったでしょ？実際、未だにあの人たちの中で誰かと恋をするなんて考えただけで鳥肌ものだよ。」

思い浮かぶいくつかの顔と自分が熱く見つめあっているのを想像しただけで、ぶるりと悪寒が走る。

「…彼らじゃないのか？」

「うん。むしろ何でそこにエリーの考えが辿り着いたか聞きたいよ。」

「それは夏休みを利用して、アイルは彼らに会いに行っただけだよ。つたし。」

言われてそういえば、夏休み実家に帰る人ごみに紛れて『彼ら』がいる場所に戻った。だけど、それは

「あの人たちに会いに行つたつていうよりは、ストレス解消に行つてきたつて感じだし。」

「だけど！アイルはいつだつてここよりも彼らと一緒にの方が生き生きしているじゃないか。私は怖いんだ。アイルがいつか向こうに帰つてしまふんじゃないかつて。」

なるほど、だから私の恋をした相手が『向こう』の誰だと思つて過剰反応した訳か。

いつもは妙にしつかりしていて同い年とは思えないほど大人びているエリーが、しゃがみこんで頂垂れている姿は何だか可愛らしい。しかも、私の事をこんなに思つてくれている彼女の姿に、嬉しさが溢れてきて私は腕を伸ばして頭を撫でた。

「アイル？」

「私はずっとここにいます。そう決めまし、その事を後悔してもいいい。」

「うん。」

いつもだつたら、こんな子供にするようなことをすれば逆上するに違いないのに、妙におとなしく『うん』と返事をするエリーに私は笑つた。

「それに恋をした相手はこのメルト・ファウストの人なんだし、そんな心配はご無用よ！」

そして、彼女を安心させるためにと明るくそういうと、エリーがずいっと顔を私に近づけた。

「そつだ。彼らではないなら、恋の相手は誰なんだ？女子高で、最近遊びにも行かないアイルにそんな出会いがあるわけないだろう

「？」

可愛らしい子供返りしたエリーは霧散して、妙に据わった目が眼前に迫る。

目を逸らすことすら許されない気配に、話は誤魔化せそうにもない。

ただ別に隠すことでもないかと考えていると、エリーとはまた別の趣がある美少女が私の頭の中で怖い顔をした。

『言っておくが、俺が男だと誰か一人にでもばらせば、それ相応の報復を覚悟してもらおう。』

どうみても自分より愛らしく、儂げな美少女が眼光鋭くドスを聞かせてそう言い放った姿は滑稽で、だけどそれが自分の好きな相手かと思うと複雑のような笑えるような。

（まあ、別にニアの事を好きだということ、彼が女装した男だっというのは全く別の事だもの。言ってもいいよね。）

心の中でそう言い訳して、私は『ローズハウス』で出会った同じ年頃の『少年』に恋したことをエリーに告げた。（実際、女装した姿しか見たことはないけど、ニアは身も心も男らしいから間違っ  
てはいない）

だが、彼女の追及はそこに留まらなかった。

「そいつのどんな所が好きになったんだ？」

「うーん、まずは『外見』かなあ？」

「顔だけの男のどこがいい!？」

まあ、『外見』といった私の言葉を聞いたら、そういう反応があ

ってもいいだろう。

エリーが思っている『外見』と私の思う『外見』には大きく隔た  
りがあるし、私も別に美少女が好きなのわけでは断じてない。

それに本当の所は『外見』が良いということには、さして魅力は  
感じていないと思う。

だけど、初めてニアを見たときに、彼を（あの時は彼女だと思  
っていたけど）綺麗だと純粹に思った。

だからこそ、ニアの事が心に残ったし、声をかけようと思った。  
彼が醜くても好きになるような気もするけど、でも、人間って結  
局体と心があって一つの存在なのだから、それを切り離して考える  
のも変な話だ。

だから、やっぱり彼の外見も好きなんだと思う。

「まあ、でもね？私も一時は悩んだんだよ？この感情が恋かどうか  
って。」

初恋ではないけど、それまでの恋とニアへの感情は大きく違っ  
た。

「始めはね…同情かとも思ったの。」

「同情？」

「うん。彼は昔の私ととてもよく似た境遇にいて、それに同情して  
いるんだって思った。そう考えた方が楽だとは思っけど…やっぱり  
恋なんだって諦めた。」

ニアへの感情はすごい単純なような気もするけど、複雑に入り  
組んでいるような気もして、他人に説明するのは難しい。

そもそも…と考えると、私はちらりとベッド近くの時計を見て話を  
切る。

「ま、この話はもうやめよう！ぼちぼち消灯時間だよ？」

「あ、そうか。ごめん。」

「うん。別に謝ることじゃないでしょ？」

「違う。家族といえど、今の私はアイルの感情に立ち入りすぎた気がして…昔の事や向こうの事は言わない約束だった。」

こうやって例え家族であっても、悪いと思っただら素直に謝ることができるのはエリーの美德だと思う。

私もそんな彼女の潔さが心地いいと感じる。

「別に気にしていないよ。私はどこにでもいる普通の女子高生だもん。恋バナの一つや二つバンバンするって。また、聞いてね？」

だから、エリーが気に病まないよう笑って、左手をヒラヒラさせる。

「うん。ありがとう。おやすみ。」

「おやすみー」

彼女を見送った後、結構長く話していたのに洋服が決まっていないうちに気が付いて、消灯までの短い時間に私は慌ててそれを決めなくてはならなかった。

### 3 - 1 (後書き)

ちよつと少なめですが、何とか更新再開できました(笑)感想などで励まして下さった皆様、ありがとうございます。

内容は現在とは違って、また妙なラブコメ?みたいな雰囲気を漂わせつつありますが、色々アイルやニア(フィリー)の事情なども明らかにできたらと思っておりますので、お楽しみに。

ちなみにエリーがアイルの部屋にやってきたのは、最近の彼女が拳動不審だったから(笑)本人に自覚はありませんが、青春真っ只中のアイルは一人でテンパっているようです。

翌朝、ローズハウスへの道をとぼとぼと歩く私の服装は、Ｔシャツにズボンといういつも通りの色気のないものだった。

「はあ」

消灯時間まで自分なりに悩んでみたものの、どうにもしっくりこない上に、見るからに気合いが入った服装は奉仕活動をしに行くのに適しているのか？という今更な問題に直面した。

結果、考えるのが面倒になって洋服を散らかしたままベッドに入り、朝起きて、自分で片付けなかつたくせに、部屋の中の惨状に泥棒でも入ったのかと驚いた。（すぐに気が付いたけど）

そもそも急に私が洋服と格闘する羽目になったかと言えば、ローズハウスでの何気ない日常が原因だった。

「アイルねーちゃんも、ニアさんみたいにもっと可愛い恰好すればいいのに。」

それは本当に悪意のない言葉だったと信じたい…いや、悪意がないということはその言葉が真実ということになるからダメなのか？……ともかく、その言葉を発した少年レイモンが私を見上げる瞳には、子供の特有の本当に不思議でなりませんという無邪気さしかなかった。

あのお風呂での衝撃の事件より数か月、どうやらローズハウスで

は私とあと数人しかニアを男だと知らないらしい中、それでも彼に纏わりついた私に折れる形で私とニアは友達となった。

友達というのは私しか思っていないかもしれないけれど、ローズハウスに私がいたらニアは大抵私の所にも必ず顔を出してくれるようになった。

それは何だか懐かない猫に一步だけ近づけたような、妙な高揚感を私に味あわせてくれた。

そして、そういった変化に伴い、今までは家族以外とは交流を持たなかったニアも私と一緒に大人や子供と接することも多くなり、その日もまた子供たち相手に遊んでいたところでのこの言葉。

「あははは」

なんていうか、乾いた笑みしか出てこない。

何しろそれは事実。

別に女になりたい訳じゃないと言うニアだけど、その女装ははつきり言って趣味の領域を超えていた。

洋服の下は女物の下着を身に着けているし（…これについては如何なものかと思うけど）、あまり露出の激しくない服装を選んでくれるらしいけどズボンよりスカートのほうが多い。

更にさりげなく流行を取り入れお洒落度は高いはずなのに、決して品位を失わず、かといってローズハウスで浮くこともないという着こなしには頭が下がる。

「確かに！アイルねーちゃんもオシャレの一つもしないと、彼氏ができないよお。」

今度はおしゃまな少女ファラの言葉。

比較的子供たちには私とニアはセットで扱われているような気がするけど、その実、待遇に差があるのは明確だった。

垢抜けない普通の女子高生の私と、絶世の美少女でどこことなくステリアスな雰囲気漂う美少女ニアでは当たり前前かもしれないけど、子供たちのなつき方にも大きな差がある。

私に対しては『ねーちゃん』と軽口も叩くくせに、

「オシャレしても生憎、私には彼氏はいないけど？」

にっこりと私相手にはあまり見せない美少女の微笑みを浮かべて顔を覗き込めば、少女はたちまちのぼせ上ったように赤くなり、もじもじする。

「ごめんなさい！ニアさんの事を悪く言っつもりはなかったの…。

「いいよ。ごめんごめん、からかつちゃった。」

ニアに許しがもらえれば、とたんに満面の笑みになる。

そんなやり取りをしつつ、私は自分の洋服を見下ろしてため息をつく他ない。

私の服がいつもどことなくダサくて、ニアがお洒落なのはわかりきっていたことで、だけど、ニアは男で私は女。更にニアは私の片思いの相手なわけで……

(それって女としてどうなの?)

そんな風に思わず対抗意識を燃やしてしまったのが昨日の洋服騒動の始まりだったたりする。

結局、いつも通りの服を着ているのだから、戦う前から負けているというか、そもそも戦いなんて始まってすらいないんだけど…、ともかくそんな気分なのでかなり凹んだままローズハウスに着いた。ニアはまだ来ていない。

別にこの日に来ようと互いに約束している訳じゃないので、ローズハウスで会えないことも多い。

だけど、今日はそれでよかったかもと、複雑な乙女心に浸っていると、

「アイル。ちょっといいか？」

こんな風にニアが現れたりする。

何で今日に限ってと、そんな感情が思わず外に出たらしく、

「別に嫌ならいいの。」

と、美しすぎる微笑み。

機嫌が悪いというか、他人行儀になると妙に女の子らしくなるニアの氣質を理解しつつある私は慌てて首を横に振る。

「うっんっ大丈夫。えっと、キ又さんの散歩が終わったら」

「散歩なんてしたくないわ！」

私の言葉が言い終わる前に、車椅子に大人しく収まっていたはずの80歳を大きく過ぎたキ又さんが叫んだ。

長い年月で縮んだ体は車椅子に座ると更に小さくなり、髪は真っ白、顔はしわくちゃ。

かなり認知が進んでいて、こうしてついさっきは散歩に行きたいと自分で言っていたはずなのに、数分後には自分が言ったことも忘れてる。

時々、暴言を叫んで周囲を驚かせたりすることもあるけど、基本的には舌足らずなしゃべり方が妙に可愛らしいこのお婆ちゃん（大人といわないとここでは怒られるけど）が、私は割と好きだった。

「え〜？キ又さんがさつき散歩したいって言ったんじゃないですか。」

「わたしや、そんなこと言っとらんよ！」

背後から覗き込むようにして顔を見ると、皺の深い所から小さな目がちらをぱちりと見ている。

円らな瞳にきよとんとした表情がぴったりで笑ってしまう。

老人を可愛いと思ったことなんて、ローズハウスに通うまで思ったこともなかったけど、こうして直に接してみるとお爺ちゃんとお婆ちゃんはとても可愛らしい。

姿というか、仕草とか言っていることとか、妙に微笑ましいのだ。それは実際に大変なお世話をしていない私だから言えることかもしれないけど、レイチエルさんたちも良く子供だけでなく老人たちにも『可愛いね』と言っている。

それを聞いて本気で怒っている人もいるけど、大抵の人は喜ぶか照れたりしている。

いくつになっても他人に可愛いと言われたり褒められたりするの  
は、やっぱりうれしいものなんだと思う。

「そうだったけ？うーん、じゃあ、散歩やめてどうするの？」

「眠たい。眠たい。」

言いながら膝からの下を上下に動かす。

彼女なりのそれがダダの捏ね方だと知っている。

「横になりたいの？」

「うん。」

「しょうがないなあ。でも、昼間に寝ちゃうと夜寝れなくなっちゃうから、ちよつと寝てもいいか聞いてからね？」

車椅子をリターンさせて建物に戻って、スタッフさんに事情を話すと、とりあえず寝かそうかとキ又さんは私の手から離れた。

ああなってしまうと多分、自分の願いがかなうまでしゃべり続けてしまうから、スタッフさんも苦肉の策だ。

「その代り夜はちゃんと寝てよ？」

「わかっとなるわ。」

すぐさまよい返事が返ってくるけど、多分数分後には忘れているだろうと、笑いながらスタッフさんに連れて行かれるキ又さんを見送って、私はようやくニーアに向き直る。

「ごめん。それで何だった？」

ニーアは私といることで、子供や大人とも話すようになったけど、やっぱり積極的には関わろうとはしない。

それは彼が男とばれない為なのか、っていうか、何で女装しているの？って話だったりするんだけど、生憎それを尋ねたら無言で睨みつけられた。（なので、趣味という可能性もやっぱり否定できない）

ニーアは私にとって、数か月たった今でも謎が多すぎる人物のままだ。

だけど、変わったこともある。分かったこともある。

「ああ、塔と一緒に付いてきてくれないか？」

「了解。今日はどの花にする？」

言いながら庭を見渡して、夏になり明るい色で咲くいくつかの花を見つける。

「この間は白だったから、あの黄色の花はどうだろう？」

異存はなかったので、スタッフさんに断ってその花を少しだけ摘ませてもらうと、私たちは揃って小さな塔へと足を向けた。

ニアと出会って数か月、私は彼の秘密を一つ知った。

私が塔に行くことになったのは、一応ニアから誘われたという形になる。

塔にはニアの家族専属のスタッフがいるので、ローズハウスの住人はおるか、スタッフも塔に入ったことはないというのに、どうして私が？

誘われた時、そんな疑問が当然湧いた。：というか、あの話の流れでどうして私を誘う気になったのか、その理由は今も謎のままだ。

そもそも始まりは塔から出てきたニアを見つけて、偶々声をかけたことだった。

あの雨の日に心配をかけた謝罪を含め、庭で雑草取りを買って出していた私が、腰が痛いと言より臭く背筋を伸ばしていたところ、ニアがボタンと音を立てて塔から出てくるのを見かけた。

「？」

その様子が普段は落ち着いた優雅な動作とは違って、まず違和感を抱いた。

ちなみにこの頃はまだニアが男だとは知っていたけど、彼に対して恋愛感情を抱いてはいなかったと思う。

「ニア、来てたんだね。」

こちらに小走りに駆けてきた彼にその声をかけると、あからさまに顔をそむけられた。

両手は顔の近くで、ハンカチを固く握りしめられている。

私が来る前から塔にいたのかニアを見かけていなかったの、その声をかけたのだが、視線を合わせないまま何が気に入らないのか妙に刺々しく言い返される。

「そうですね、私がここにいて何か問題がありますか？」

この頃はまだ女度が上がると機嫌が悪い証拠だと知らないけど、その声に苛ついた様子を感じ取って、何かあったんだろうなと察しはついた。

放っておく方がいいのかなとも思ったけど、何処となく余裕がないように見えて、私に怒鳴るのは割といつもの事だし、怒鳴らせてガス抜きでもさせるかという感覚で私は軽く言葉を続けた。

「別に悪いわけないでしょ？寧ろ私はニアに会えて嬉しいくらいだし？今日も可愛い恰好だね。うんうん、眼福眼福！」

ニアが男だと知った後も、ばらすなと脅された意趣返しも込めて、私は彼をとびきりの美少女として褒め讃えることを日課にしていた。

それをする度、男としてのプライドが邪魔をするのか、ニアが怒ったり慌てたりするのが面白かったのだ。

だから、今日もすぐに返ってくる怒号を期待したのだが、予想とは違う表情を浮かべるニアに驚く。

「………本当？」

何だか妙に頼りなさげな瞳で見返してくる表情は幼気で、その目

元は赤い。

(泣いているの?)

道理で顔を合わせようとしないはずだと思う一方で、男とは思えないほど美しく儂げな姿に私はうっかり危ない道に足を踏み外しそうになったり。ならなかったり。

ごくりと唾を飲み込んで、一つ深呼吸。

(うんうん。私、別のことを考える……よし! 『本当?』という聞き返しは何についてだ?)

『悪いわけないでしょ?』、この真偽を確かめるのは会話の流れとして有りだ。

だけど、『会えて嬉しい』『可愛い』『眼福』のあたりの真偽を確かめるつもりならば、明らかにいつものニアとは違う。

いつもなら真偽を確かめるでもなく、怒鳴られるのが当たり前になっっている。

これは本格的に何かあったらしいと、私は彼に一步近づいた。

「ニア?」

「……いいえ。何でもないんです。ごめんさない。」

名を呼べば、はっとしたように大きく目を開いた後、私から顔をそむけ一步後ずさる。

そこには先程までの幼気な頼りなさは無い。

だけど、もっと危ない何かがあるような気がして私はぎくりと心が音をたてるのが分かった。

「待って! 何でもないなんてこと、その態度でないでしょう?」

手を取って、自分に引き寄せる。

同じ年の男子の割には細く、背が高いとは言えないニア相手ならば、私でも力で対抗することは十分に可能：というか、私から腕を取り返そうとするニアの非力さに逆に妙に心配になったくらいだ。

「アイルには関係ありません！放して。」

「：何で急に女の子ぶるの？いつもは私にはそんな話し方しないじゃない。」

細い腕、白い肌、ニアは自分を女だと見せるために、方法まで教えてくれなかったけど、男としての成長を意図的に止めていると聞いた。

その成果は女の私も真つ青なほど完璧と言わざるを得ない。だけど、それは彼の体に悪影響を及ぼさないのだろうか？どうしてそこまでして彼は女でいなければならぬのか？なんとなくだった疑問が、急に知りたくてたまらない謎になった。

「今日からそうする！もう私にあまり話しかけないで：貴方と話しているのを誰かに聞かれて、男だとばれる訳には  
「はあ？どうしていきなりそんな話になるの？」  
「だって、女の子ぶるなって！それが嫌なら私に話しかけないですよ！」

言っていることが、はちゃめちゃだ。

ヒステリックな声に、庭で遊んでいた子供たちがこちらを窺っているのに気が付く。

「こっちに来て。」

私は腕をとつたまま、建物と塔の間の影にニアを引つ張り、子供たちの目を遮る。

喧嘩していると思われても構わないけど、ニアが男だと会話の中からバレても困る。

抵抗を見せる彼だが、やっぱり非力な彼に私を止める力はない。

「何！？もういいでしょ！？」

ヒステリックになつていても、女言葉が抜けない。

ニアがいつから女の子として生きているか分からないけど、女としての部分が彼にとって深く根付いているだと思ふ。

女になりたい訳ではないといったニア。

いらぬものを無理やり押し付けられ、甘んじてそれを受け入れるしかない彼の境遇に同情を感じた。

でも、だからと言ってこんな風にヒステリーになる彼を可哀想に思っているだけでは、何故だか私はいられないと思つた。

「八つ当たりはみつともない。」

ヒステリーなニアに対して、私の声はとても静かだった。

だけど、しっかりと彼を見つけて告げた言葉に、ニアが怯えたような表情を浮かべる。

「急にそんなことを言い出す意味が分からない。ニアが何も言わなきゃ、私にはあんたがそんなに何に動揺しているのか分からない。それが私のせいだつていうなら私が悪いのかもしれない。だけど、私に関係ないのなら、私にヒステリーになるのはただの八つ当たりでしかない。」

何かがあつたニアを更に追いつめる様な事を言っている自覚はある。

私の手の中のニアの腕が、小刻みに震えている。

「ニアは私を友達だと思っていないのかもしれないけど、少なくとも私は友達だと思って居る。友達に何かあつたら心配だつてする。それは私に限つたことじゃない。ここにいる人だつたら、ニアに何かあつたと思つたら多分みんな心配する。」

何かに傷ついたり、動揺したり、色々な感情を表に出すことは悪いことじゃない。

人間つて誰しもが一人で生きて居るわけじゃないから、それで周りを心配させてしまつても構わないと私は思う。

だけど、それを拒否するんだつたら、誰にもその感情を知られたくないと思うなら、それを一人で抱え込む覚悟が居ると思う。

「その心配を鬱陶しいと思うのもニアの自由。それを拒否するのだつて自由だと思う。だけど、それで傷つく人の事を覚えていて。少なくとも、私は今のやり取りで傷ついた。」

まあ、自分でも傷ついている人の言い分じゃないとは思つ。

実際に傷ついたかと言われれば、これで顔の皮の厚い私は別にと答える。

ニアのヒステリーを聞き流してあげても良かった。それが彼にとっては最良なのかもしれない。

『お嬢さん。世の中、自分だけが悲劇のヒロインだと思つて居ると、後で恥ずかしい思いをすることになりますよ?』

ふと頭の中で昔、私を窘めた大人の声が響く。

あの時はその人のことを心底鬱陶しいと思った。何てお節介だとも思った。

私は多分、同じことをニアに言っている。（言い方は私の方が粗野で乱暴だけど）

自分がすごいお節介な女になって、彼に説教する資格もなく、偉そうにしたり顔で言葉を発していると自覚がじわじわとせり上がってきて、私は片手で口を押さえてた。

（私、ひよっとして）

そして、彼の境遇に、彼の様子に、私はかつての自分を重ねていたのだと気が付く。

（これは昔の私に、今の私が言いたいことなんだ。）

そこに考えが行き着くと、急に自分が恥ずかしいというか、居たたまれなくなって私も俯いて、言葉を失った。

しばらく、妙な沈黙が私たちの間に落ち、何を言おうと頭を回転させているとニアの方が先に口を開いた。

「……ごめん。」

謝った声は小さい。

「そうだ・な。自分が傷つけられたからって、誰かに八つ当たりしていい理由にはならない。」

感情が昂ぶっているんだろう。

新たな涙がニアの瞳に溢れてくる。

それを男らしい仕草で拭い去ると、彼はばつが悪くてどう返した

らいいか分からない私をヒタリと見据えた。

あのいつもの美少女に似合わない強い眼光。

「アイル」

名を呼ばれて、どうしてだか胸が跳ねた。

それまで掴んでいた腕が急に恥ずかしくなって離す。

「今から一緒に塔に入ってくれないか？」

「塔に…？でも」

「あんたは何もしないで一緒にいてくれればいい。『俺』を男だと知っているアイルにしか頼めないんだ。」

私はニアが自分のことを『俺』と呼ぶのを初めて聞いた。

「ニアのままじゃやっぱり嫌だ。俺はフィリーとして、あの人に自分を知ってもらいたい。」

「フィリー？」

私に聞かせるためというよりは、自分で自分に言い聞かせるように頷くニアに首を傾げた。

「俺の本当の名前。フィリー・ヘインズって言うんだ。アイルも誰もいない時は、そう呼んでくれ。」

なるほど『ニア』っていうのは女の子の名前だから、本当の名前は別にあつたわけかと思ひ至る。

だけど、私にとって『ニア』はニアでしかなくて違和感を感じた。だけど、

「フリー」

「ああ。」

その名を呼んで答える彼は見るからに美少女なのに、私にはもう彼が男の子にしか見えなくなっていた。

私って単純だと思う。

『フリー』という名を呼んだ瞬間から、私は本当の意味で彼を男として意識しだしていた。

ニアに連れられて初めて入ることとなった塔の外観は白く、円柱状になっていて、頂上は王冠みたいに形作られている。

窓は上方にしかなく、下方にあるのは目の前にある鉄製の重々しい扉だけ。

ニア改めフィリー（そう呼べと言われたので）がゆっくりとその扉の鍵を回し、音を立てて扉は開いた。

（まるで監獄）

たった一つしかない入口には嚴重な鍵がかけられ、窓は逃げ出すことができない上の方にしなかない作りになんとそんな感想が漏れる。ローズハウスの敷地内にあるというのに、塔の内部には全く違う空気が存在していた。

重く、静かで、痛い…塔の内部が薄暗いからそんな風に思うのかもしれないけれど、私は別の世界に迷い込んだような気すらした。

塔の内部は色々なものが溢れていたが、フィリーは迷うことなく上へと延びる螺旋階段を目指す。

「こつちだ。暗いから階段に気を付けて」

フィリーの後に続いて階段を上りながら、一階にキッチンらしきものがあることに気が付いた。ここで料理とかも全部しているようだ。

「ここにはこの間、失踪騒動を起こした俺の家族。母親がいる。」

表情は見えなくても、声の固さからフィリーの緊張が伝わってくる

る。

「この塔は母の揺り籠で棺桶。母を守る盾で、閉じ込める檻。……  
本当は俺がいちゃいけない場所なのかもしれない。だけど、俺は

」

フィリーの母親がどんな人物で、どんな状況にある人なのかは全く分からない。

だけど、私がこの建物に抱いた感想は強ち間違ってもいなかった。多分、ここはその人を外から守るための場所であるのだろうけど、それは同時にその人の自由を奪い、閉じ込めることとなったんだろう。真実、そういう意図がないとしても。

この場所は現実と隔離された場所なのだ。

そして、フィリーがそれ以上何も語らないまま、塔に唯一しかないとと思われる部屋の前に到着する。

数秒扉の前で立ち止まり、意を決してフィリーは扉をノックする。

「はい。」

「フィリーだ。入るぞ。」

帰ってきた女性の声にフィリーは一声かけて、ドアノブを回した。薄暗い塔内から、窓からの光が満ちた室内の明るさに目が眩む。目が慣れて、フィリーの後に続いて部屋の中に入ると、鋭い声と何かがぶつかる音が聞こえた。

「いやああああ！来ないで！！！」

悲鳴と変わらぬ女の声。

ばさりとフィリーの足元に本が落ちたのを見て、私は先程聞いた

音がフィリーにぶつけられた本だと知る。

「だ、大丈夫？」

本とはいえ角が当たったりしたら、かなり痛い。

フィリーの背後から彼の覗き込める位置まで移動して、私は絶句する。

彼の表情があまりに悲しそうで、辛そうで…だけど、私が覗き込んでも彼は気が付いた様子がない。

フィリーはただ一点を見つめたまま、立ちすくみ、何も聞こえず、何も見えなくなっていた。

その視線の先にある存在に私は目を丸くする。

「おやめください！！！」

「イヤイヤイヤイヤ！！！」

車椅子の上で狂ったように叫びをあげ、髪を振り回す痩せ細った女性と、彼女を押さえつけようと抱きしめるようにしている女性。

「クルナアアアア！！！！！」

胸を抉るような、悲痛な叫び。

そこには狂気じみた憎悪と絶望があった。

なりふり構わない剥き出しの強い感情が、声となり私を貫く。

痩せ細り、眼球の形が浮き彫りになった瞼は限界まで開かれ、そこからまるで血を滴らせたように鮮やかで、燃える炎のように煌めく赤い瞳がざらりと光った。

叫びと同じ感情しか有していない、その瞳が私を竦み上がらせる。そして、その感情はすべて、フィリーへと向かっていた。

強張った彼の表情から、彼があれほど動揺していた原因が臍げな

がらに浮かび上がる。

この女性がフィリーの母親なのだ。そして、彼女は全身でフィリーを拒絶していた。

「か…母さん。僕だよ、貴方の息子のフィ  
「来るなああああああ」

震える声でフィリーが伸ばした手を強く振り払い叫んだ彼女は、その勢いのまま車椅子から転げ落ちる。

「母さん!!」  
「アイルフィーダ様！」

フィリーの言葉ともう一人の女性が叫んだ声に、私はわずかに固まる。

(アイルフィーダ?)

フィリーの母親は私と同じ名前だった。

そんな衝撃的な出会いを果たして、早数か月。

フィリーのお供をしてそれから何度も塔へとお邪魔することとなり、私もこの親子の複雑な事情という奴をぼんやりと知ることになった。

フィリーの母親であるアイルフィーダさんは、昔、自我を失うほ

ど深い心の傷を負った。

以来、時たま正気に戻ることもあるらしいけど、基本的には無感情・無表情・無気力。

彼女の眼は何も映さず、耳に言葉は届かず、口が意味のある音を発することは、ほとんどない状況だという。

息はしている。生きてはいる。

だけど、彼女は誰かが食事を食べさせ、服を着せ、風呂に入れなければ、何もできない人形と成り果ててしまったのだ。

その後、アイルフィーダさんがどういう経緯でこの塔に入ることとなったのかは定かではないが、彼女はこの塔で専属の使用者、あの時アイルフィーダさんに抱きついていた女性ガーネットさんと二人っきりでひっそりと生き続けている。

見舞いに来るのは、息子のであるフリーと、そのお供の私だけ。複雑な事情はフリーの無言と、ガーネットさんの何も言わせない笑顔の前に、聞くことはできていないけれど、やはり計り知れない何かがあるんだろうと察しはついた。

さりとて何の力もない小娘にできることはなく、できることと言えば、フリーに誘われてお供をするのと、その時に花の一つでも持参するくらいだ。（しかも買ったわけでもなく、ローズハウスの花を拝借しているし）

「ガーネットさん。こんにちは、これ今日の花です。」

「アイルさん。ありがとうございます。さっそく飾らせていただきます。」

アイルフィーダさんと区別するためか、ガーネットさんは私のことを一度も『アイルフィーダ』とは呼ばず、『アイル』と呼んだ。

多分、年ごろは40代半ばといった所なのだろうけど、きつちりと纏められた髪に化粧気のない顔で、常に笑顔なのにどうしてかい

つも相手にN oと言わせない威圧感を漂わせる。

そして、まるで貴人の世話をするように、アイルフィーダさんのことを様付で呼び、何をするにも恭しく、ローズハウスで住人たちの世話をしているスタッフさんたちとは明らかに一線を画している。アイルフィーダさん専属というのもあるかもしれないけれど、主人と使用人のような厳粛な関係を少なくともガーネットさんは築いているらしい。

塔の中で私がそんな彼女に花を渡している横で、車椅子に座った母親の前に膝をつきフィリーは取り留めのない話をしている。

「母さん。今日はいい天気だよ？」

「学校で面白いことがあったんだ。」

「アイルが子供たちに馬鹿にされて怒っていたんだよ？」

最後は少しばかり言わなくてもいいことのような気がするけど、返事がない母親に穏やかに言葉をかけ続けるフィリーははた目から見ればバカみたいかもしれないけど、フィリーの思いを知っている私はその光景を見るといつも心が痛んだ。

アイルフィーダさんはフィリーに視線すら向けなまま、茫然と前を見ているだけで、初めて会った時のような激しさは微塵も感じられない。

それは今の彼女に完璧な女装を施されたフィリーは『女』として認識されているから…

アイルフィーダさんは『男』に強い拒否反応を見せるらしい

負った心の傷に『男』が強く関わっている…のかもしれない（これはあくまで私の予想）、ともかく『男』という存在が近くにいてだけで、彼女は初めて会った時のように激しい拒否反応を示す。

それは血を分けた息子フィリーに対してもそれは同じ。

あの日、フィリーがとても動揺していた日。

フィリーは暑さのあまり服を一枚脱ごうとして、うっかり上半身裸になってしまい、母親に男と認識された。（顔が女でも、さすがにあの胸板の上に偽乳を乗せただけでは男とばれるだろう）

結果、アイルフィーダさんは発狂し、それを目の当たりにしたフィリーは塔から逃げ出した。

それまで完璧な女装で、彼は一度も男として母親と接したこともなかったらしい。

男を拒否すると話には聞いていたけど、想像と現実が違う。

あの存在すら認めない強い拒否。しかも、それが母親が初めて発した彼へのまともな言葉と感情だったとしたら、それはあまりに辛い経験だっただろう。

そこを私に八つ当たりするなどと責められれば涙の一つもでるだろうと、それを聞いて少しづつが悪くなった。

だけど、その後、フィリーはまた母親の元に戻った。

発狂したまま、彼を拒絶したままの母親であろうとも、それから逃げ出さずに受け入れることにしたのだ。

そして、フィリーは自身を息子、すなわち男として受け入れて欲しいと思うようになった。

それまでは母親が心安らかなれば、女としてしか受けられなくてもいいと思っていたらしいが、女装にも限界があるし、やはり本当の自分を受け入れて欲しいと考え直したらしい。

とはいうものの、フィリーは女装はやめていない。

いきなり男の姿でアイルフィーダさんを混乱させても仕方がないと、とりあえずは女装したまましゃべり方などから本当の男としてのフィリーを見せていくと彼は語った。

結果として、今のところアイルフィーダさんも目立った拒否を見

せないまま今日に至っているけど、私にはそれまでの彼と今の彼の違いが全く分らない。

「そうですか？全然違いますよ…フィリー様は女性の演技が本当に上手でいらっしやるから。」

首を傾げる私にガーネットさんはそういうけど、少なくとも私の前ではいつもあんな感じだし、それで問題がないから気にしないことにした。

（それよりも私、いつまで付いてくればいいのか？）

付いてくるのが嫌な訳はないのだけど、来たところでいつも母子の語らいを見守ってお茶を啜っているだけの私は身の置き所に困ることもしばしばだったりする。

「アイル。今日もありがとう。」

塔を出るころにはすでに夕方で、門限も近いので帰るつとするとフィリーも一緒に帰ることとなった。

「ううん。別に私は何もしていないし。」

塔に行くようになって一緒にいられる時間は増えたけど、フィリーとアイルフィードさんの時間を邪魔するわけにもいかず、私たちに取り立てて進展はない。

というか、私も進展させようと思っていない。

フィリーに恋していると思うし、もし、彼がそれに答えてくれたら最高にハッピーだと思う。

だけど、今はまだその時期じゃないとも思う。

何しろフィリーはアイルフィーダさんの事でいっぱいいっぱいだと思うし、何もできないけど彼が悩んでいるとき、せめて、相談くらいには乗ってあげたい…なんて、似合わない乙女なことを考えたりしている自分が嫌いじゃないのだ。

今はまだこうして夕日に伸びる二人の長い影が重なるくらいでいい。それを見るだけで嬉しい自分が楽しかった。

「あのさ、俺…じゃなかった私、アイルに何かお礼がしたいと思っているんだけど。」

「お礼なんていいよ。言ったでしょ？私は何もしていないし。」

だから、急にそんなことを言われても恐縮する。だって、言える訳ないけど私の行動には下心ありありだ。

「私だってお礼って言っても、大したことはできないよ。だから、考えたんだけど、この間子供たちに服装を馬鹿にされてたよな？」

「ばっ馬鹿になんてされてないし。」

そうはいつでも、今の自分の服装を見下ろして段々と声が小さくなる。

フィリーはそんな私にこともなげに言った。

「だから、私がコーデイネイトしてやるよ。」

「なっ！」

絶句。何を言い出すこの男。

「心配するな。私のいつもの服は自分で選んでいるんだ。子供たちも私の服装は褒めていただろう？洋服を買ってやるほど財力はないけど、見立ててやるには十分なセンスだと思うぞ。」

だから、任せると言わんばかりの彼に『問題はそこじゃない！』と声を張り上げたかったけど、ぱくぱくと口を動かすしかできない。

「今は可愛くて安い服も多い。私も秋に向けていくつか服を見ようと思っていたから、ついでだ。ついで。来週の休み。ローズハウスに行く前、午前中とか時間はあるか？」

「あ…え？」

てきぱきと私の返事も聞いていないのに、彼の中で話が進む。

「だから、時間はあるのかと聞いている。」

「あります！」

ずっと覗き込まれて、のけ反りつつも咄嗟に答えてしまう。

「そうか。じゃあ、来週10時にメルト・ファンドの時計台で待ち合わせにしよう。じゃあ、私は向こうで迎えを待つからお別れだな。アイル、気を付けて帰れよ。」

そして、颯爽と走りさっていくフィリーをボンヤリと見送って、硬直すること数分。

(これってもしかしてデート！？)

フィリーにそんな意図はないと分かっているけど、私には突如持ち

上がった重大事項に嬉しさよりも、混乱が先んじていた。

## メルト・ファウンド

それはメルト・ファスト最大の多目的娯楽施設の名前だ。

買い物、食事、遊園地、舞台、映画など細分化すればするほど数限りない、人間が遊ぶための要素が詰め込まれたその場所は、5年前オープンした。

娯楽施設というものがなかった訳ではなかったけど、細々としたパツとしないものばかりしかなかったため、メルト・ファウンドができた直後は毎日人が入りきれないくらい溢れ、社会現象まで引き起こしたことが記憶に残っている。

ミィハーな女学生たちに紛れて、私も何度も遊びに行った。

5年たった現在でもその人気は健在で、様々に趣向を凝らしたインターテイメントは行く度に違う楽しさを客に与えてくれている。

『私はこの場所で全ての人に夢と希望が与えられればいいと思っています。束の間、つらい現実を忘れられる場所…人にはそんな場所が必要なのですから。』

インタビューでそう答えていたのは、メルト・ファウンドの創始者にして、自治役員の一人ケルヴィン・ヘインズ。

彼の名はメルト・ファウンドができたことにより一躍有名になった。

(なんて堅苦しいことをいくら考えても、全然落ち着かないわね)  
ぶつぶつと頭の中でこの場所について難しく考えてみたものの、全然落ち着かず、私は大きく肩を落とす。

一週間も経てば、自分の中の感情を整理して落ち着けるかと思いきや、約束の日が近づくにつれて私の落ち着きのなさには拍車がかかった。

あまりの挙動不審ぶりに周囲は心配し、自分でも制御できない感情に私も戸惑った。

それも今日で終わりかと思えば気が楽に…なすはずもなく(だって今日が本番だし)、私は現在一人でメルト・ファウンド入口付近で往生際も悪くキョロキョロ・そわそわしていた。

ちなみに時刻は9時30分…実はその30分前からここでスタンバイしていたりするのだけど、何度時計を見てもなかなか時計の針は進まない。

(何か…早く来てほしいような。来てほしくないような)

気持ち的には一人でアタフタするのも疲れたし、さっさと済ませたいという気持ちもある。

だけど、そうそうあるはずもないフィリーとの二人っきりで出かけるというイベントが、終わらなければいいとも思っている。

相反する二つの感情の狭間、まさに複雑な女心を実感して唸っている、人混みの中に彼というか彼女を見つけて、その全てがどっかにいってしまう。

「アイル！早いな、待たせたか？」

「う、ううん！今来たところだよ？」

なんて、会話…ああ、本当にデートみたいだと、緩む頬を無理や

り引き締める。

(いかにいかに)

首を振る振って、改めてフィリーに向き合う。

彼の美少女ぶりは今日も素晴らしい。

長い髪はシュシュで一つに結ばれ、珍しく活動的に7分丈のズボンは薄桃色。可愛らしいけど決して下品ではないシフォンのカットソーはオフホワイト。その上にモカ色のカーディガンと綺麗なコサージュをつけている。

夏っぱさを残しつつ、もう秋先取りですか？と言いたくなるような、ファッション誌から飛び出てきた感じの服装には降参するしかない。

そして、フィリー越しにぶつかっていくつかの視線。

私一人のときは感じなかった視線が、フィリーと合流した途端に四方八方からビシバシ感じられる。

いつもは子供か老人しかいない中でしかフィリーとは会ったことはなかったので実感しないけど、こうして街中で会ってみると彼の美少女ぶりは凄まじいんだと笑えてくる。

(誰もフィリーが男だなんて分かんないよねえ)

そんな中で自分だけ彼が男だと知っていることに、妙な優越感を感じつつ、一方、私の服装はといえば昨夜も数少ない洋服たちと戦った結果、今回は辛くも勝利を収めたような気がする。

何しろ唯一の外行き用のワンピースを投入したのだ。これで負けてはどうしようもない。(…そもそも誰が勝ち負けを決める訳ではないのだけ)

「じゃあ、チケット買って中に入ろうか？」

メルト・ファウンドは様々な娯楽施設が一堂に介していて、来る人は皆それぞれ目的は違うだろうけど、とりあえず中に入るチケットが必要なのだ。

「買い物するだけで必要なかと憤慨する人もいるだろうけど、ここはいるだけで何もなくても十分楽しめるテーマパーク。」

チケットさえあれば、アトラクションには乗れずともショーやパレードは見放題だし、入場チケット代と言ってもジュース一個買うくらいの値段だから、これらを見に来るためだけに入場する人も少なくない。

「ここは買い物をするために来るといふよりは、雰囲気を楽しむための場所と言つて良かった。（店の品揃えは確かだけど）」

「それなら私が持つてる。」

「え？ありがとう、先に用意してくれたの？お金払うよ。」

チケットブースを見れば人がたくさん並んでいるので、並んでいては時間もかかっただろう。

「何言ってるんだよ。別にいいよ、父親からくすねてきただけだし。」

「ええ？駄目だよ！」

「…なあ、アイル。ひよつとして気が付いてないのか？」

「何を？」

本気で何に気が付いていないのか分からないので首を傾げると、笑つてフィリーは首を横に振った。

「ねえねえ、私、何を分かっているの？」

この話の流れで何を分かれというのか全然見当もつかないけど、何だか分からないことが恥ずかしいような気がして、笑うフィリーに問い詰める。

「いやいや。別に？ほら、行くところか？」

「ちよっ！」

だけど、フィリーはそれ以上何も教えてくれず、私の背を押してメルト・ファウンドの中に入った。

その時、私たちを見つめる目があることにも気が付かず。

「……………」

フィリーが絶対私に似合う服があるといって連れてこられた店の中で、私は沈黙していた。

「これなんかどうだ？…これも絶対似合いそうだ。」

次々とフィリーの手によって服が当てられるけど、彼の言葉に私は絶対にそれはないと声を大にして言いたかった。

俯いた視線を僅かに上げれば、きらきらと光る安っぽそうなガラスのシャンデリアが、店内のこれでもかというほどキラキラして、可愛らしい感じの洋服たちを照らしている。

(可愛い…うん可愛いとは思っのよ)

店内には私たちを始め、数人の女性客と店員がいて、その全てが明らかに私とは違う種類の服を可愛らしく着こなしている。

その全てにはフリルやら、レースやらがたくさん使われていて、そういう洋服のジャンルがあるのは知っていたし、友達にもそういうのが好きな子もいるから別に偏見を持っている訳じゃないけど…自分では絶対に着ないと思っっているジャンルの服に囲まれて、私は心底居たまれなかった。

私がそんな状態なのに彼は全く気にした様子もなく、嬉々として私の洋服を選び続けている。明らかに二人は浮いていた。

「ね、ねえ？」

「何？…あ、これもいいな。ちょっと試着してみたら？」

「ええ！しないしない…っというか、ニアは私にこれが似合っつて本気で思っているの？」

むしろ、冗談だと笑ってくれた方が嬉しかったのに、彼はあっさり頷いた。

「アイルは割と幼くて可愛い顔立ちだし、華奢だろ？髪も長くて、目も大きい、絶対こういう服が似合うと常々思ってたんだ。」

「えええ？！いや、そんな風に言われても」

少しでも照れながら言ってくれでもしたら、その言葉にも信憑性があったかもしれないが、あまりにさりとられた上に、こんな美少女相手に言われても信じられない…っというか、それは寧ろフイリーの方がその言葉通りだ。

「気に入らないか？」

「気に入らないっというか…趣味じゃないっというか。」

買ったところで絶対に着ない。

「似合う服と好きな服は別物だ。ともかく着るだけはただだし、一度試着してみなよ。」

言いながらグイグイ引つ張っていくフィリーに抗うこともできなかったらうけど、あまり意地を張って折角のデートを台無しにしたくない。

（まあ、似合わないに決まっているし。試着してさっさと脱ぐ）

そんな風に思いつつフィリーに引つ張られるままだった所、前を見ていなくて誰かにぶつかる。

「ごめんなさい！」

相手はだいぶ小さな背丈の人だったようで、よろめいて尻餅をついてしまっていて私は慌てた。

「イタタ…ううん。私も人を探しててキョロキョロしてたか  
ああ…！」

顔を上げた瞬間に交わった視線の先の瞳の色に、思わず息を飲む。

（アカ）

宝石のように煌めく赤い瞳、短くてもサラサラな銀色の髪、天使のように美しい少女…私は彼女を知っていた。

( どうしてここに？ )

混乱する私だけど答えはすぐに分かった。

「リリナ、どうしてここにいるの？」

「フィリー…あは、見つかったちゃった？」

私の背後から彼女を呼ぶフィリー。

そのフィリーに対してバツの悪そうな顔をする彼女。それが全ての答えだった。嫌な予感に頭が真っ白になった。

「外ではその名は呼ばない約束でしょう？ごめん、アイル。この子は私の幼馴染で…」

「リリナカナイ・デュヒエといいます。初めまして！！！」

私の胸くらいの背丈の彼女が、可愛らしく頭を下げながら自己紹介をする。

「それで？どうしてここにいるの？」

「だって、フィ…じゃなかったニアったら最近、全然遊んでくれないんだもん。だから、今日こそはと思って家に遊びに行ったら、もう出かけたって聞いて。」

しゅんと萎れた花のように俯くりリリナカナイ。

それまで少しだけ怒ったような顔をしていたフィリーも、そんな彼女に仕方がないなあといったように彼女の頭をポンと叩く。

そして、笑う。

( …ヤメテ )

呆然と立ち尽くしたままの私は心の中で呟いた。

そんな顔で笑わないで、優しく、愛おしくて仕方ないという笑顔：アイルフィーダさんにも見せたことないじゃない。

フィリーは17歳。リリナカナイは13歳。

この年頃の4歳差は大きい。

フィリーにとって彼女はまだ妹のような存在かもしれないけど、リリナカナイにとってフィリーはすでに恋する相手だと一目で分かった。

頬を染め、大きな瞳に好きだという感情を隠すことなく彼を見つめる表情は、少女ながらに一端の女でもあった。

そして、フィリーがそれに気が付いているか否かはともかくとして、その視線に誰にも見せない優しい微笑みを返している。

数年後の二人が恋人になっているだろうことを想像するのは、ありふれた恋物語の結末を予想するのと同じくらい容易い。

(お願い『彼女』だけはヤメテ)

「それで追いかけてきたの？ まったくりリリナの行動力には驚かされるわ。…よくここが分かったわね？」

「だって、ケルヴィンおじ様がニアにチケットをせびられたって珍しかったから。」

「っち、くそ親父め。」

小さくつぶやかれた言葉は私にもリリナカナイにも聞こえなかったけど、萎れていた彼女も、フィリーの声音が怒っていないことを感じ取ったのか、にこりと天使のような笑顔で彼を見返す。

美少女二人の競演に店内も何事かと、こちらを遠巻きに窺っている。

リリナカナイの登場に呆然自失となっていた私も、正気に戻りとりあえずはここを離れなければと思う一方で一つ気になった。

「ケルヴィンおじ様？」

まさかという気持ちで問いかける。

確かファイリーの正式な名前は、ファイリー・ヘインズ。ヘインズなんてありふれた名前だったから、気に留めていなかったと、父親がケルヴィン・ヘインズ？

「ああ…ばれた？そうなの。」

それが答えだった。

ファイリーはこのメルト・ファウンドの創始者ケルヴィン・ヘインズの息子…あの『ヘインズ』の子供。

それを理解した途端に、色々なことが私の頭の中で駆け巡った。ファイリー、リリナカナイ、ケルヴィン・ヘインズ…その三人によって導き出された結論は、私にとってあまりに残酷だった。

「アイル？どうかした？ごめん、隠しているつもりはなかったんだけど、チケットをくすねたって言っても気が付かないし、わざわざ言うのもどうかと思って。」

沈黙に沈む私が怒っていると思ったらしく、謝るファイリー。

「何でもない。別に怒っていない。それより、一旦店を出よう？」

「でも、まだ試着が…」

その声は聞こえないふりをして、私は試着するはずだった服をてきぱきと元にあった場所に戻すと一人で店を出た。

「アイル！どうしたんだよ!？」

振り返らず歩き続ける私は、店のすぐ外で手を取られる。  
向かい合ったフィリーと目が合わせられない。

(だって、こんなの酷すぎる!！)

心はまるで嵐のようにざわめき、ここが町中じゃなかったら正直  
泣き叫びたい気持ちだった。

だけど、私は笑った。

「どうもしないって、ほら彼女がそんな大きな声を出すから驚いて  
いるわよ?」

「あ…」

何だか怯えたような表情で固まっているリリナカナイに、私はし  
やがみこむと張り付いた笑みを向ける。

それぶ僅かに安心したように息を吐くリリナカナイに、私の心は  
どんどん冷たくなっていくのを感じた。

「リリナカナイちゃんはニアと遊びたかたんだよね?私と一緒に  
申し訳ないけど、それでいい?」

「はい!あ、私のことはリリナって呼んで!私もお姉さんのことア  
イルって呼んでいい?」

彼女は昔から物怖じしない、誰にでも愛される少女だった。

13歳の彼女からしたら、17歳の私は大きなお姉さんだったに  
違いないのに、全く人見知りもなく笑いかける。

その彼女を邪険にできるはずがない。そんなこと誰も許さないだ  
ろ。

それから、私たちはわずかな時間だったけど一緒にメルト・ファ

ウンドで遊ぶこととなり、私もフィリーも洋服を一着も買わずに、リリナカナイに付き合っつてパレードやショーを見た。

その後、ローズハウスに行く時間になって、リリナカナイがまだフィリーと遊び足りない駄々をこねたので、午後になってからは私だけがローズハウスへと行くこととなり、二人とは別れた。

だけど、結局私はその日、ローズハウスへはいかなかった。

そのまま寮へ帰り、自室へ直行するとベッドの中にもぐりこむと、大声で泣いた。

「どうして？どうして?!」

出てしまった決して覆らない結論。

せめて、フィリーがヘインズの息子でなければ、フィリーを好きなのがリリナカナイでなければ良かった。

それだったら、例えフィリーへの思いが報われなくても、私がこんな風に悲しむことはなかった。苦しむことはなかった。

「うっうっうっ」

泣きすぎて苦しくなった呼吸すらも無視して私はただ泣いた。

泣いたって、何も現実が変わらないと分かっていたも、制御できない感情は泣かずにはいられなかった。

せめて、彼と彼女の前で感情を爆発させなかったのが、私のせめてものプライドだった。

そして、私はその日からローズハウスへはいかなくなった。

泣き腫らした後、全てから逃げ出すことを私は選んだ。

### 3・5（後書き）

第三章これにて終了です。何だか過去編もドロドロしてきましたね（笑）

今回で何となく分かって頂けたかもしれませんが、アイルにとってリリナカナイはフィリーという存在以前より大きくて、彼女にとって決して敵うことがないと思い込んでしまっている存在です。彼女が恋敵故に、アイルはあんなに苦しんでいるというのに呆気なくフィリーを諦めようとしているのがその証拠です。……さて、それはどうしてか？その理由はまた先の物語で明らかにする予定なので、そこまでお付き合いいただければと思います。

ちなみにフィリーがアイルに勧めていた服は、いわゆるロリータファッションみたいなものです…が、一応彼の面子を保たせるために証言しておきますが、彼は決してロリコンではないです（笑）リリナカナイのことも当時は多分（？）妹のように思っているだけだと思います…ええ、多分（笑）

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5374w/>

---

愛していると言わない

2011年10月14日00時52分発行